少しも馴れなかつた。すると家康は怒つて元忠を緣側から突き落した。元忠も怒つて其の亂暴を父に知らせたが、忠吉は却つて之を喜んで「末頼もしい若君だ。此の忠吉に遠慮もなく其方を突落す膽力は見上げたものだ。不平に思はず忠義を勵め。」と申し送つたことがある。

家康岡崎に歸る　家康は十五歳の時（弘治二年）一時岡崎に歸つたが、之は御墓參りの爲であつたから全く義元の手を離れて岡崎城主となつたのは桶狹間合戰の後で、十九歳の時（正親町天皇の永祿三年）である。此の合戰の時家康は今川勢に加はつて先づ丸根城を陷れ、更に大高城を守つて居つたが、水野信元から義元の戰死を知らせて來た。一同は早く退却をと勸めたが、家康は「水野は伯父ではあるが、織田方であるから、信用は出來ない。」と曰つて之に從はず、人を出して其の實否を確めた後、岡崎に引上げた。此の時部下の者は直ちに岡崎城に入らうと勸めたが、家康は「義元は存生中に岡崎城を返してやるとは曰はれなかつた。然るに今城に入るのは不義理であらう。」と曰つて一時或寺に陣取つた。然るに間もなく城中の今川勢は義元の討死を聞き、城を棄てて逃げてしまつた。すると家康は「今川家が棄てた城ならば取つてもよからう。」と曰つて、凡そ十四年の間離れてゐた岡崎城に入城した。

さて今川家では義元の子氏眞が家を繼いだが、氏眞は親に似ぬ卑怯者で、父の仇を討たうとせず、不品行に身を持崩してゐた爲に、家康は之を見限り、幸ひ水野信元等の勸もあつた所から、永祿四年信長と和睦して、先づ三河の國内を平げ、更に鋒を今川家に向けることとした。かくて永祿十一年家康は武田信玄と申合せの上、今川家を攻めて氏眞を逐ひ、其の領地を分けて遠江を自分の領分とし（信玄は駿河を取る）、それより二年の後（元龜元年）濱松に移つた。

三方原の戰　信玄は家康と心を合せて今川氏を滅したが、元來京都に上つて天下に號令しようとの志を持つてゐる所から、遂に家康の領地を狙ひ、元龜三年十月自ら大軍を率ゐて信濃より遠江に出で、頻に諸城を陷れて濱松に押寄せようとした。家康は時に三十一歳の元氣盛り、濱松の北方なる三方原に出陣して一心不亂に之を防いだ。然るに武田勢の爲に攻立てられて流石の家康も敵しかね、討死の覺悟を定めた。此の時馳せつけた家來の一人が「勝敗は戰爭の常、まだ大將が命を棄てるべき時ではない。私に任せて置いて御逃げなさい。」と曰ひながら、馬の首を南に向け、强く其の尻を槍の柄で敲いた。馬は家康を載せたまゝ駈出して濱松城に這入つた。時は同年十二月二十二日の夕方。家來

が城門を閉ぢようとすると、家康は「閉ぢては後れて歸るものに不便でもあり、又敵に臆病を示すことにもなる。門を開いた儘其の内に篝火をたいて置け。」と命じ、自分は御茶漬を二三杯たべた上、一間に入つて高鼾で寢てしまつた。やがて武田勢の軍師馬場美濃守信房等が城門に押寄せたが、門内の篝火を見て「逃込みながら門をも閉ぢず、其の上に篝火までたいて居るのは不思議である。輕々しく攻入つては伏兵にかかる心配がある。」と曰つて討入を差控えた。そこに門内からは鳥居元忠等が出て戰ひ、逃歸つて來た徳川方の敗兵も武田方の後を攻めかけた爲に、信房等は兵を引上げた。若し此の時信房が城中に攻入つたならば、家康は無論殺されたであらうに、餘り用心し過ぎた爲に失敗した。思へば家康は運の強い人である。翌天正元年信玄は三河に兵を進めたが、武運拙くして軍中に病死した。それが爲に家康は舊領地を回復し、三、遠二州を全く我が物とすることが出來た。

五箇國の領主となる　信玄の子勝頼は父の志を繼ぎ、天正三年五月大兵を出して三河の長篠城を圍んだが、既に信長の章に述べた通り、家康は鳥井勝商の忠義と信長の援兵とによつて見事に勝頼を攻破り、更に同十年三月信長と共に甲斐に攻入つて武田氏を滅し、其の功によつて駿河をも領地とすることが出來た。さて此の際僅かの事ながら家康の人柄の一端を窺ふべき事があつた。即ち勝頼が天目山麓に自殺して武田家が亡びた時、其の首を差出すと、信長は首に向つて「其方は自分の力量をも辨へず、生意氣にも織田家に敵對した不屈者。かく成果るは自業自得だ。」と罵つた。然るに家康はわざ〳〵腰掛けてゐた床儿を離れて「數箇國を領する領主がかかる姿になるとは天命と申す外はあるまい。」と曰ひながら鄭重に禮拜した。甲斐、信濃の人々は之を聞いて竊に心を家康に寄せる樣になつたといふことである。信長は禮儀作法などには無頓着で、往々人の恨を速いたものであるが、家康は幼少の時から他人の家で成長しただけあつて、常に無禮や無作法の無い樣に注意してゐたものと見える。本能寺の變の後、甲斐、信濃二國の人民が領主に對する不平から亂を起した時、家康は兵を進めて之を平げ、自分の領地として遂に五箇國の領主となつた。

江戸城に入る　天正十二年小牧、長久手の戰に家康が秀吉に見込まれて、遂に其の妹を妻に迎へる樣になり、天正十四年秀吉に面會した後は快く秀吉の事業を助け、小田原征伐の後、功によつて關東地方八箇國の領主に封ぜられたことは既に述べたが、家康は天

正十八年八月一日を以て江戸城に入つた。其の城は嘗て大田道灌が武藏野の要害を選んで築いた城として有名ではあるが、家康入城の時、其の玄關の床板には古船の毀が用ひてあつたのであるから、餘程粗末なものになつてゐたに相違ない。兎に角家康は一時入城はしたが、留守役を置いて城の普請を營ませ、自分は始終秀吉について京都、大阪、名護屋、伏見等に日を送つてゐたのである。

家康の本心と三成の野心　家康は秀吉の存生中其の相談役として忠實律義に仕へた爲に大いに秀吉の信用を受け、領地も廣まり、官位も上つて慶長元年には正二位内大臣に任ぜられた。其の上秀吉薨去の際には五大老の筆頭として天下の政治を決すべき遺言までを受けた。若し家康が眞に豐臣家を思ふ律義者であつたならば、信長の後を受けた秀吉の如く、世の中の尊敬を受けながら出世をしたであらうに、豐臣家に對する律義は秀吉の存生中に留まり、其の後は無理にも天下を德川の物にしようと心懸けた爲に、家康は一時此の野心を隱してゐた古狸とまで言はれる樣になつた。後の行ひから察すれば家康が忠實に秀吉に仕へてゐたのは、其の本心からではなく、靜かに時節の來るのを待つてゐたものと見てよからう。

さて此の家康を恐るべき野心家として嫌つてゐたのは**石田三成**である。一體三成は江州坂田郡の生れ、幼名を佐吉といひ、或る寺に預けられて、讀み書きの修業をしてゐた。其の頃同國長濱の城主であつた羽柴秀吉が或日鷹狩に出た。咽喉が乾いた爲に圖らず其の寺に立寄つて御茶を所望した。すると佐吉は大きな茶椀にぬるい御茶を七八分目も入れて差出した。秀吉は之を飲みほして、「もう一杯。」と曰つた。佐吉は前よりは少しく熱い御茶を半分足らず入れて出した。秀吉は之をも飲み終り、試みに「今一杯。」と所望して、三杯目を飲んで見ると、小さな茶椀に極熱い御茶が入れてあつた。そこで秀吉は其の才に感じ、住職に賴んで佐吉を貰ひ受け、側近く召使ふことにしたが、此の時佐吉は十三歲の少年であつた（天正三年）。之より佐吉は才にまかせて秀吉の機嫌を損じない樣に心懸け、痒い所に手の届く程に氣轉をきかせて仕へた爲に、大いに秀吉の信用を受け、二十三歲の時（天正十三年）には位は從五位下、役は治部少輔となり、名を三成と改めた。戰功こそなけれ、三成の言ふことは政治上用ふべきものが多かつた爲に、秀吉の信用は年と共に加はり、遂に近江水口の

城主として四萬石を領するまでになつた。其の頃秀吉が「其方も一城の城主となつたが、善い家來があるか。」と聞くと、三成は「家來らしいものは此頃召抱へた島左近勝猛のみで御座います。」と答へた。秀吉は「島左近は豫て聞及ぶ勇士である。知行を多く與へなければ長く足を留めさすことは出來まい。如何程與へてゐるのか。」と尋ねると、「四萬石の内、一萬五千石は左近に與へて居ります。」と申上げた。秀吉は之に感心して「主從の知行に之程差の無いのは珍しい。併し其の志でなければ左近に頭を下げさせることは出來ない。よく與へた。」と褒めたて、後に左近が上洛した時に、秀吉は之に羽織を與へた上で「治部と相談して天下の政治にも氣を付けて呉れよ。」と曰つたことがある。斯樣な次第で三成は日に月に重く用ひられ、二十八歳の時（天正十八年）には近江佐和山（彦根の東北）の城主に取立てられて、十九萬四千石の領主となつた。此の時三成は島左近の祿をも増さうとしたが、左近は「私の今の知行は、三成殿が五十萬石の大名になられたとしても、尚不足のない高です。外の人々に御やり下さい。」と曰つて辭退した。そこで世間の人は、

治部少輔に過ぎたるものが二つあり

島の左近に左和山の城

と言ふ樣になつた。家康の二百五十萬石、清正の二十五萬石、行長の二十四萬石に比べると、三成の領地は多くはないが、差したる戰功も無くして二十萬石近くの大名に取立てられたのは、全く秀吉に信任せられた御蔭である。そこで屢〻戰功を立てた大將連中の中にも萬一三成に睨まれては自分の身の上に關るとの心配から、其の屋敷に出入して三成の機嫌を取る者が少くなかつた。併し加藤清正、福島正則、池田輝政、黑田長政、淺野幸長、小早川秀秋、細川忠興などは、軍功もない三成が秀吉の信用を受けて威張るのを不快に思ひ、『虎の威をかる狐』として憎んでゐた、目先の早い三成は其れと悟つて、是等の人々を失敗させる工夫を凝らし、尚一方に於ては小西行長、毛利輝元、宇喜多秀家、上杉景勝など有力な人々と親しくして己の勢を強める工夫を怠らなかつた。朝鮮征伐の時、清正が秀吉の怒に觸て呼還されたことがあり、小早川秀秋が其の領分を代へかけられたこともあるが、之は三成の讒言の爲である。幸に清正の申開きと、家康の取計によつて、三成の惡計は成功しなかつたが、兩人が三成を憎む情は一層甚しくなつた。察するに三成が兩

人を秀吉に讒言したのは、單に兩人を憎んだ爲ばかりではなく、次第に豐臣家の忠臣を除いて自分の勢を强め、豐臣家を滅さないとしても、其の實權を握らうといふ位の野心は持つてゐたものらしい。世には三成が家康の野心を看破し、豐臣家の爲と稱へて兵を起した所から、家康は大の野心家、三成は豐臣家の忠臣と見る人もあるが、三成が眞に豐臣家を思ふ人であつたならば、清正や秀秋を却けようともしなかつたであらうし、又秀吉をして秀次に切腹を命ぜしむる樣なことも無かつただらうと思はれる。何分にも三成は關原の合戰後殺されてしまつた爲に、豐臣家に對する野心が有つたとも、無かつたとも斷言が出來ない。自然見る人の心々によつて、三成を或は忠臣と見、或は野心家とする譯である が、著者は今の所家康も野心家、三成も亦野心家であつただらうし、後に述べる關原の合戰は此の野心家同志の衝突であると思ふてゐる。

さて家康は秀吉の遺言通り伏見に居つて政治を決し、利家は秀頼の御傅役となり、慶長四年正月淀君と共に秀頼を連れて大阪城に徙つた。家康は其の頃既に其の本性を表はして我儘の振舞を始め、我が子の妻として伊達政宗の女を迎へる約束を結び、又自分の養女を福島正則等の子の妻にする約束をした。然るに諸將勝手の結婚は嘗て秀吉が禁止して置いた事であるから、三成等は其の不法を利家に申出で、家康を五大老から除かうとまで言出した。利家が人を以て家康を責めると、家康は「婚約の許可は媒介者が得たことと思ふて約束したのであるから、自分の罪ではない。許可が受けてなければ中止すればよい筈、然るに家康を五大老から除かうとは不屆至極。」と曰つて三成等の過言の罪を責めた。之は三成等を怒らせて故ら喧嘩を始めさせようとしたのである。斯る間に利家は病に罹り、同年閏三月六十二歳で大阪に薨じた。折柄豫て三成を憎んでゐた清正、正則、長政、幸長、忠興等七人は共に三成を殺して日頃の怨を晴らさうとしかけた。三成は驚いて秀家の屋敷に逃込んだが、人の勸めもあつたから更に伏見に走り、家康に頼んで七人をなだめて貰ふことにした。之は三成が前の七人をなだめる者は家康より外には無いと思ふたからであるが、又一つには一時頭を下げて頼めば、家康をして「三成には德川に對する反抗心無し。」と思はせる計略にもなると考へた爲で、三成が狐の本性を表はした所である。流石に古狸とまでいはれた家康は欺かれた如く見せかけて三成の頼を承諾した。やがて前の七人は伏見に來

で「三成を渡して貰ひたい。」と申込んだ。すると家康は「三成は豐臣家の重臣。諸君に渡して殺させるに忍びない。若し强ひて渡せと言ふならば、家康は三成を助けて諸君と戰はう。」と曰つた。七人は意外の言葉に驚いて三成を殺すことを思ひ止まつた。之は狐に勝る狸の計略で、「平生仲の善くない三成に對しても、賴めば助ける律義な家康。まして太閤の賴を受けたからには、秀賴を疎略にする筈はない。」と世間を欺く爲にしたことである。さうとは知らず家康に恩ある者、三成を憎める者は益々家康に心を寄せる樣になつた。さて家康は人を以て三成に「貴公が此の儘にしてゐては、復何事が起らないとも限らない。一時佐和山城に歸られるのが得策であらう。」と諭した。三成は「身に取つての一大事。暫く御猶豫を願ふ。」と答へて置いて、密に使を大阪にゐた景勝に送り、時機を見て共に兵を起すべき約束を結び、さあらぬ體を裝ふて佐和山城に歸つた。すると家康は前の緣談を中止しないのみならず、結納を取りかはし、又自分の恃みとなるべき者に領地を增す樣な我儘を始めた。三成も城に修理を加へ、濠を深くし、兵糧を集めて戰爭の用意を怠らなかつた。景勝もそろ〳〵其の準備に着手しなければならない時になつたが、幸に慶長三年正月會津百二十餘萬石の領主にしられてゐた爲に、同四年の七月「會津に徙されてから日がまだ淺くて、領內の樣子も分らない。暫く御暇を貰つて領地を治めた上、來春上阪致しませう。」と申出で、許を受けて歸國した。油斷はならじと家康が氣を附けてゐると、景勝も城は勿論道、橋に至るまで修繕を加へ、兵糧、武器を貯へ、又頻りに浪人を招き始めた。嘸家康は心中竊に「喧嘩の種を蒔いてくれるな。」と喜んだであらう。併し踏むべき順序は踏むべきだと考へたからか、先づ使を三成に送つて「貴公が城の修理などを始めたのは陰謀あるが爲なりとの噂が高い。何故の修理か。」と詰問した。三成は「多年伏見や大阪に在勤してゐた所から、城も道路も荒果てたままになつて居る。其れが爲の修繕で、陰謀などとは意外の御尋ね。」と答へた。家康は更に其の實否を糺さうとて四天王の一人たる本多忠勝を佐和山に遣はした。三成はわざ〳〵之を道中に出迎へ、城中に案內して饗應し、言葉巧に城の修理の辨解をした。忠勝は歸つて「三成には異心なし。」と告げたから家康も「三成は怪むに及ばず。」と言觸らした。一體忠勝は智勇勝れた武士である。假令三成が辯舌を揮ふとも、欺かれる樣な人ではなく、家康も三成の心の底はとくに承知してゐるのである。

然るに兩人共に三成を疑はない樣に言觸らしたのは、三成に欺かれた如く裝ふ計略であつたのである。若しも家康が三成を疑ふ樣子を見せるならば、三成は秘密の上にも秘密にして謀を運らす心配があるからである。

景勝も家康に疑はれない樣にとの用心から、慶長五年正月年賀の使者を家康に差向けた。家康は之を召して「會津では頻に戰爭の準備をしてゐるとの噂。若し事實ならば其の儘にはして置かない。其方歸國の上は早く景勝殿に上阪して世間の疑を解かれる樣に勸めよ。」と言渡した。使者は歸つて此の旨を傳へたが、景勝は一向頓着しない。そこで家康は詰問の使者を會津に差向けて、「二心なくば誓書を出すべし。」と申渡した。之に對して景勝は「橋や道の修理は領内の便利を圖る爲であり、城の普請を始めたのは城が狹いからで、秀頼公に叛く心は毛頭爲い。然るに誓書を出せとは無禮千萬。察するに何者かの讒言を信ぜられたものであらう。歸國後一年にもならぬ内に上阪すれば、領内の政治に手が屆かない。」と答へて誓書も出さず、上阪もせず、其の上家康の我儘な行ひを責めた。そこで家康は出兵の用意を始め、景勝征伐の命令を諸將に傳へた。すると三成は尙も家康の疑ひを避けようとて、「會津征伐に從軍したい。」と申出た。家康は「其れには及ばず。」と曰つて之を聽屆けなかつた。つまり家康は三成の計略に陷つた樣に見せかけて、之を滅す工夫をしてゐたからである。

家康の東下と三成の擧兵　家康は自ら會津征伐に向ふこととして鳥居元忠に伏見城の留守居を命じた。元忠は家康が今川家に質になつてゐた時からの忠臣で、此の時は既に六十一歳の老人。足を痛めてゐたから杖に縋つて歩いてゐた。家康の伏見出發は慶長五年六月十八日であつたが、其の前晩は主從親しく夜の更けるのも忘れて話合つてゐたが、いざ出發となると、元忠は「或は之が今生の御別れになるかも知れません。御成功を祈ります。」と曰ひながら立ちかけたが、足が痺れて立上ることが出來ない。家康の指圖で近寄つた人々に助けられて漸く見送つたが、見送る元忠も、見送られる家康も、目には涙の露を宿してゐた。

家康は徳川の四天王と呼ばれたる酒井、榊原、井伊、本多を始め、手足と恃める家臣を率ゐて東海道を下り、道々諸城主の饗應を受けつつ、或は遊獵を試み、或は名所を見物し

て道を急がず、七月二日秀忠に迎へられて江戸城に入つた。かく家康が道中を急がなかつたのは三成が必ず兵を擧げるに相違ないと見込んでゐたからである。秀吉恩顧の諸將の中正則、輝政、忠興、幸長、高虎、長政など多くの人々は家康と前後して江戸に下り、會津征伐に從軍することとした。

かかる間に三成は大谷吉隆（越前敦賀の城主）を佐和山に迎へて相談を纒め、大阪に出て長束正家、増田長盛等を說いた上、家康の罪を鳴らす書付に、「太閤の御恩を忘れぬ人々は、家康を擊つて秀賴公に忠義を盡せ。」といふ意味の書面を添へて西國の諸大名に送つた。すると輝元、廣家、秀秋、義弘、秀家、行長等は之に應じて大阪に集つた、清正は家康の伏見出發以前家康に「あなたが東に向はるれば、三成が兵を擧げるのは知れ切つたこと。然るに自ら出馬せられるのは輕率の嫌ひがあります。私が代つて忠興、正則、長政等と共に出陣致しませう。會津近くには伊達政宗もゐて御味方致しますから大丈夫と思はれます。萬一味方が不利の時に御征伐なされても遲くはありません。」と申出たが、家康は「早く會津を征伐すれば、他は恐るるには及ばない。唯氣にかかるのは味方の少い九州であるから、どうか領地に歸つて心配の無い樣に取斗つて貰ひたい。」と答へて其の言葉を用ひなかつた。そこで清正は熊本に歸り、九州に於ける三成方の領地に攻入る用意を整へてゐた。

大阪に於ては評議の上毛利輝元を總大將と定め、更に家康に從つて東下した諸將をも味方に加はらせようとの考から、質として其の妻子を城中に入れようとし、先づ細川忠興の夫人を城中に迎へようとした。然るに夫人は潔く自害した爲に、三成は大いに驚き、他の家族にも自殺されては大變な當違ひになるとて、城中に入れることは思ひ止まり、其れ其れの屋敷に番兵を配つて、監督させることにした。

細川忠興の夫人　は明智光秀の女で、信長の御世話によつて忠興の夫人となつたのである。然るに本能寺の變があつた爲に、忠興は怒つて夫人と緣を斷ち、或る片田舍に住はせて番人を附けて置いた。程なく光秀が殺された時、番人が自害を勸めると、夫人は「家に在りては親に從ひ、嫁しては夫に從ひ、夫死しては子に從ふのが女の道である。今自害すれば孝道を盡すことにはなりもしようが、夫に對する道に背くから、夫の指圖あるまでは自害はせぬ。」と曰つて詫住居を續けてゐた。秀吉は其の志に感じ、忠興に諭して再び迎へて其の夫人とさせた（天正十二年）。其の後會津征伐の時、忠興は夫人を大阪に留め、子忠利と共に家康の軍に加はつた。慶長五年七月十六日三成方の使者が來て夫人を城內に迎へようと迫つたが、夫人は「既に夫が家康公に從つたからには、死しても石田の命

命には從はない。」と答へた、三成は威しかける積で數百の兵を其の屋敷に差向けると。夫人は夫及び子に宛てた遺書を侍女に渡して自分の自害を見届けた上屋敷を逃出す樣に命じ、尙家來どもには「ウツカリ寄手と戰へば、秀賴樣に對する謀叛人と謂はれる心配があるから、假令寄手が討入つても戰ふな。」と諭して門を閉ぢさせ、火を放つて自殺した。男も及ばぬ思慮分別、實に見上た眞婦である。嘸三成も呆れたであらう。

島居元忠の戰死　さて大阪には三成方の大將連中が多く集つて來たが、空しく日を送るべき時ではないといふ譯で、先づ細川藤孝（幽齋細川忠興の父）が守れる丹後の田邊城（今の舞鶴）、及び伏見城を攻取ることゝし、田邊城に對しては一萬五千餘の兵を差向けた。伏見城に對しては宇喜多秀家が「伏見城は太閤の築かれた堅城である。城中の兵は少くとも、之を陷れることは容易でなからう。寧ろ攻めずして開城せしむるが上分別。」と曰出した爲に、使ひを送つて元忠に降服を促した。元忠は「不肖ながら主人の下知によつて伏見城を預つたからには、之を明渡すことは出來ない。聞くも汚らはしい御勸は一切御無用と答へて籠城の決心を示し、城兵千八百餘人に向つては「兵は寡く、援兵を求める所もない。死すべき時が近づいたから、最後の酒宴を開くべし。」と言渡し、一同と盃を擧げて死を盟つた。三成は秀家、義弘、秀秋等をして伏見に向はせたが、秀秋は豫てより心を家康に寄せて居る所から、竊に書面を元忠に送り、「自分は家康公に御恩返をなすべき者であるから、城中に入つて御身と共に西軍と戰ひたい。」と申込んだ。すると元忠は「眞に御恩返の御心があるならば、此の城を攻落した上、東軍の來るのを待つて西軍を御擊ち下さい。御內意は關東に注進致します。」と答へて、此の旨を家康に申送つた。秀秋も使を江戸に下し、黑田長政を經て家康に內應することを通知した。此の頃吉川廣家も亦長政に內應を申込んだ。さて伏見城の攻擊は七月二十日に始つたが、城は名城、城主は鳥居、一同死を決して防いだ爲に容易に攻落すことが出來なかつた。併し日を經るに隨つて、城兵の一部が志を變じ、故西軍を城內に入れ、火を放つて本丸に迫つた。流石の元忠も力盡きて自殺し、八月一日城は終に陷つた。主人の命を重んじて死力を盡した元忠は、三河武士の本領を發揮した者と謂ふべきである。

三成は毛利輝元を西軍の總大將として大阪に留まらせ、自ら諸將と共に兵を率ゐて美濃に入り、大垣城を占領して之に據り、諸將を要地に配置して東軍に當る用意を怠らなかつたが、岐阜の城主織田秀信、信州上田の城主眞田昌幸も西軍に應じた。

關原の戰　是より先江戸に下つた家康は七月十九日秀忠に命じて先づ會津に向はせ、同月二十一日自分も江戸を出發した。かく會津の征伐を急がなかつたのは、景勝と兵を交へて後に兵を西に引返すのは面倒が多いと考へたからと見える。道々鳥居からの知らせを待ちながら進んで同月二十四日下野の小山に泊つた。此の時秀忠は宇都宮に着してゐたが、人を出して家康の機嫌を伺はせ、結城秀康（秀忠の腹違の兄）は結城から出て來て家康に面會した。所が其の夜伏見からの使者が到着して三成が兵を起したことを告げた。

家康は少しも驚かず、諸將を自分の宿に召寄せ、人をして「聞けば三成は兵を擧げたさうである。妻子を大阪に置いて居る人々は嘸氣懸りであらう。今日の味方が明日の敵となるのは弓矢取る身に免れ難いことであるから、若し今西軍に味方しようとする人があつても、家康は少しも憾とは思はない。隨意に軍を引上げられよ。」と謂はしめた。一同は顏を見合せるばかりで一言もなかつたが、福島正則は「石田は秀賴公の命と稱して兵を起すとも、公はまだ僅かに八歳。何事も御承知ある筈はなし。全く石田が野心の惡巧。正則は家康公の前驅となつて三成を討つ所存。妻子の身の上を氣遣ふべき場合ではありません。」と申出で、一座の者も皆之に同意した。家康は大いに其の志を喜び、結城秀康を宇都宮に留めて景勝に備へ、秀忠をして中仙道より西に進ませ、福島正則、池田輝政を本隊の先鋒として東海道より上方に向つて先發せしめ、自分は一先づ江戸に歸つた（八月四日）。東軍の本隊は續續進んで尾張の清洲に集り、軍略を定めて美濃に入り、先づ岐阜城を圍んで織田秀信を降し（同月二十三日）、更に兵を赤坂（不破郡赤阪町）、大垣方面に進めた。家康は關東に於ける我が領内をも氣遣つた爲か、江戸城にゐて出陣を急ぐ樣子もなかつたが、岐阜城陷落の報知を受けて後九月一日江戸を出發し、日數重ねて清洲に到着した（同月十一日）。併し疲勞を休める爲でか、或は秀忠の軍の到着すべき頃だと思ふた爲か、病氣と稱へて其の日も翌日も此處に逗留した上同月十三日岐阜に進んだ。其の土地の或る坊樣が大きな柿を獻上すると、家康は大垣（大柿）は程なく我が手に入る筈。此の大柿は御供にやらう。」と曰ひながら、之を其の場に捲散らし、御側の者共が我劣らじと拾ふのを見て喜んだ。必勝の見込が有つたので、心に餘裕があつたと見える。

三成は使を大阪に送り、輝元の出陣を促して居る中に家康は早くも同月十四日赤坂に進

んだ。西軍は評議の上、其の夜大垣城を出て關原（不破郡關原村）に退き、三成は島勝猛等と共に北國街道の北に陣取り、島津義弘、小西行長、宇喜多秀家、大谷吉隆等は天滿山の麓に陣し、

小早川秀秋の軍は松尾山に、吉川廣家、長東正家等の軍は南宮山中に陣地を構へたが西軍の總數は凡そ八萬であつた。明くれば慶長五年九月十五日、東軍約七萬五千は夜明前より關原に向つて行進し、福島正則等は天滿山方面に對し、黑田長政等は北國街道方面に對して陣を据ゑ、午前八時頃から開戰した。所謂天下分目の大合戰、兩軍互に鎬を削つて猛烈に戰ふこと數刻に亙つたが、勝負がつかない。然るに松尾山の秀秋及び南宮山の廣家は少しも戰はない。既に述べた如く秀秋も廣家も東軍に内應すべき約束を結んでゐたからである。三成は急使を松尾山に走らせて秀秋に戰を促し、正家は廣家に開戰を逼つたが、兩人共に動かない。家康は陣地を關原村近くに据ゑて秀秋等の内應を今か〳〵と待構へてゐたが、正午頃になつても其の樣子が見えない。そこで松尾山に向つて一齊射擊をさせた。そこで秀秋は命令を部下に傳へ、山を下つて急に大谷吉隆の陣に攻込んだ。東軍は之に勢を得、鯨波の聲を揚げて西軍に迫つた。此に於て西軍は總崩れとなり、吉隆は自殺し、勝猛も討死し、義弘は逃れて終に薩摩に歸り、行長、秀家、三成等も亦逃去つて姿を隱した。斯樣な次第で東軍は同日午後二時半頃全く西軍を破つた。首を獲ること凡そ四萬、東軍の死傷は四千に滿たなかつた。

家康は秀秋を召出して其の勞を謝し、更に井伊直政等と共に佐和山城を攻めさせた。城は三成の本城で、當時三成の父、兄などが守つてゐたが、東軍に攻立てられて之等の人々は皆自殺し、九月十八日城は陷つた。其の翌日家康は草津に到着したが、後陽成天皇は勅使を下して之を慰問せしめられた。曩に中仙道に向つた秀忠は信州上田の眞田昌幸、幸村父子を降さうとした所から關ヶ原の戰ひに加はることが出來なかつたが、同月二十日草津に着して家康の軍に合した。此の日家康は大津に進んで數日此處に滯在し、其の間に使を

大阪城に送つて「三成等は豐臣家の爲と稱へて兵を起し、何事も秀頼公の命なりと號したが、秀頼殿は御幼少、淀君殿は御婦人、固より御關係のある筈はない。御二人に對して家康は毛頭敵意を持ちません」と申入れた。秀頼母子は大いに喜び、使を大津に送つて、家康に御禮を述べさせ、毛利輝元は同月二十四日城を出て木津の別莊に入り、使を送つて家康に降參を申出た。そこで家康は伏見城の修築工事を始めて置いて同月二十七日大阪城に入り、秀頼に謁した上、戰後の處分をすることゝした。

細川藤孝の名譽　細川忠興の父藤孝（幽齋）は丹後國田邊城に於て一萬五千の西軍に圍まれ、慶長五年七月二十日頃から僅か五百の兵を指揮して惡戰苦闘を續けてゐた。元來藤孝は文武の道に通じ、殊に和歌の名人であつた。西軍が押寄せることを聞くと、或は秘藏の二十一代集、源氏物語が燒失せることもあらうとの心配から、之を朝廷に獻上して籠城した。併し古今集の秘傳と謂つて秘密に人に傳ふべき古今集の傳授はまだ誰にも授けてゐなかつた。後陽成天皇は若し藤孝が亡くなれば、此の秘傳が絶えてしまふと思召し、勅使を丹後に下し、西軍に對しては圍を解かしめ、藤孝に對しては開城して難を免れよと御諭しになつた。九月十二日（關原の戰より三日前）西軍は圍を解き、翌日藤孝は城を出て終に高野山に入つた。後に家康は之を京都に迎へ、天皇は文才ある公卿を入門させて其の教を受けさせられた。尙家康が將軍となつて後、藤孝は幕府の儀式制度などに關する相談を受け、慶長十五年七十七歳で病死した。之が今の細川侯爵家の先祖である。

加藤清正、小西の領地を取る　三成が兵を起すと、清正は兵を小西行長の領地に入れて宇土、八代の二城を陷れ、將に薩摩をも攻取らんとする勢を示した。此の時例の新納忠元（拙齋）は大口城を守つてゐたが、肥後の加藤が來るならば、煙硝着に、だご會釋。だご（團子）は何だご、鉛だこ。其れでも聽かずに來るならば、首に刀の引出物」といふ歌を作り、家來共に唄はせて士氣を鼓舞したといふことである。併し島津が家康に降參した爲に、清正は兵を熊本城に引上げた。

増田昌幸、幸村九度山に入る　德川秀忠は四萬に近き軍勢を率ゐて中仙道を進んだが、信濃國上田の城主眞田昌幸に妨げられて關原の戰の間に合はなかつた。元來昌幸は軍略家として知られてゐた人で、三成の親類であり、其の次男幸村の妻は大谷吉隆の女であつたから、三成、吉隆は共に書面を送つて西軍の味方とした。然るに幸村の兄信幸は家康の養女を妻としてゐた爲に、東軍に應じて秀忠の部下に加はつた。慶長五年九月二日秀忠は信州小諸（佐久郡小諸町）に着し、使を上田に送つて降服を勸め、信幸も頻に手紙を以て降參を促したが、昌幸、幸村は之に應じない。そこで東軍は同月六日城の攻撃にかゝつたが、容易に落ちない。其の中に秀忠は家康から「九月一日江戸を出發するから、其方は美濃に急行せよ。」との書面を受取り、兵を留めて上田城に備へ、十日小諸を出發し、十七日妻籠（信濃國西筑摩郡吾妻村）に至つて關原の戰の勝利を聞いた。斯樣な譯から秀忠は大いに昌幸、幸村を憎み、戰後の處分の時、兩人を殺させようとしたが、信幸が頻に助命を願ひ、「若し御許がないならば、先づ私を殺して下さい。」と申出た爲に、其の志に感じて兩人の死を宥し、之を紀伊に逐遣つた。そこで兩人は高野山近くの九

度山に住み、昌幸は慶長十三年六十五歳で病死し、幸村は後に豐臣秀頼に仕へ、大阪夏の役に戰死した。併し信幸は此の後も德川家に仕へて信州松代の城主となつた。今の眞田伯爵家は其の子孫である。

戰後の處分　關原を逃出した諸將の中、長束正家は自分の城地水口（近江國甲賀郡）に歸つたが、池田輝政等に攻められて自殺した。**三成**、**行長**は一時姿を隱したが、程なく捕へられて十月一日京都で殺された。**島津義弘**は薩摩に歸り、兄龍伯（義久）の手を經て降參を家康に申出た。**宇喜多秀家**は長らく行方不明であつたが、薩摩に逃れて島津家の世話になつた。慶長七年に至つて島津家は此の事を家康に告げて助命を願つたから、家康は其の死を赦して翌八年八丈島に流した。時に年は三十一歳。之より秀家は島に住むこと五十餘年にして八十三歳で病死した。其の墓は今も同島大賀郷に在る。**上杉景勝**は最初の勢にも似ず、秀康から開戰を申込んでも一向戰はない。三成の敗北を聞いて益々戰意を失ひ、終に家康に降參を願つた。

家康は大いに賞罰を行ひ、西軍に屬した諸將の領地を或は取上げ、或は削つて、有功の將士に與へ、同時に領分換（轉封）を行つた。茲に其の著しいものを擧げると、輝元は備中、備後、安藝、因幡、伯耆、出雲、石見、隱岐の八箇國（八十三萬六千石）を削られて、僅かに周防、長門の二箇國（約三十七萬石）を保ち、景勝は會津（百二十萬石）より移されて米澤（三十萬石）の領主となり、三成、秀家、行長等の領地は皆沒收せられた。唯島津家は其の領地が九州の偏僻なるの故を以て舊領地其の儘となつた。之に反して東軍の福島正則は安藝の廣島に移つて約五十萬石の領主となり（舊領は清洲で約三十萬石）、池田輝政は播磨姫路で五十二萬石を食むことゝなり（舊領は三河の吉田約三十七萬石）、黑田長政は筑前福岡の城主として五十二萬餘石を領し（舊領は豐前の中津十八萬石）、小早川秀秋は備前岡山に移つて五十七萬餘石の領主となり（舊領は筑前名島五十二萬石）、細川忠興は豐前の小倉約三十七萬石の城主となり（舊領は丹後の宮津二十三萬石）、加藤清正は肥後の國に於て二十七萬石を加へられ、五十二萬石の領主となつた（城地は前の通り熊本）。

是に於て從來豐臣家に仕へてゐた諸將も家康の支配を受けることとなつた。是等の大名を總稱して**外樣大名**といひ、德川の一族で大名となつた親藩、及び元より德川の家臣であつた**譜代大名**と區別せられ、親藩、譜代は重要の地に置かれるに反して、外樣大名は假令領地は廣くとも不便な地に配置せられる樣になつた。

豐臣秀頼に對しても、家康は其の領地を定めて攝津、河内、和泉の三箇國に亙る約六十五萬石の地を與へ、片桐且元に其の取締を命じ、從來豐臣氏の直轄であつた佐渡の金山、木曾の森林、及び諸大名の領地以外の地は德川家のものとしてしまつた。此の處置を見て清正以下外樣大名の多くは嘸驚いたであらうし、又始めて家康の大野心家たることを知つたであらう。

織田秀信の末路　東軍が岐阜城に迫つた時、秀信は之を防ぎかねて降參した上、出家して高野山に上り、間もなく亡くなつた。之で織田の本家は滅亡したのである。併し織田一族の子孫は今に續いて居る。明治以前大和の芝村（奈良縣磯城郡芝村）の藩主であつた織田家井に同國柳本（同縣同郡柳本村）の藩主であつた織田家は信長の弟長益の子孫であり、又羽前天童（山形縣東村山郡天童町）の藩主、及び丹波柏原（兵庫縣氷上郡柏原町）の藩主であつた織田家は信長の子信雄の子孫であつて、今は此の四家共に子爵である。

小早川秀秋の末路　秀秋は關原の戰の後、五十餘萬石の大領主となり、常に贅澤な生活をしてゐたが、精神に異狀を呈し、慶長七年十月、二十六歳で亡くなつた。其の墓は今も岡山市の瑞雲寺に在る。後嗣が無かつた爲に小早川家は斷絶し、池田輝政の子忠繼が代つて岡山城主となつた。

家康將軍となる　野心家とはいへ家康は文武兩道に長じた一大政治家で諸大名の長となるべき實力を備へてゐた爲であらう朝廷は慶長七年正月家康を從一位に敍し、翌慶長八年（紀元二千二百六十三年）二月十二日を以て征夷大將軍に任ぜられた。時に年は六十二歳。此の時家康は伏見にゐて命を拜し、同月二十五日參內して御禮を申上げ、同年十一月江戸に歸つて幕府を開いた。思へば家康は運のよい人である。信長が亂れに亂れた戰國を平定し始め、秀吉が之を受けて統一した天下を、唯關原の一戰によつて受取つた譯である。

織田が搗き羽柴がこねし天下餅
骨も折らずに喰ふは德川

といふ狂歌は巧に此の三人の關係を表はしたものである。さて家康は同十年四月將軍職を子秀忠に讓つて江戸城の西の丸に居り、同十二年七月駿府（今の靜岡市）に隱居した。かく家康が在職僅かに三年で、將軍職を秀忠に讓つたのは、樂隱居になる爲ではなく、自分の存生中に豐臣家を滅さなければ、安心して死ぬことが出來ないと考へたからである。是より先慶長八年正月十五日に家康が書いた遺訓を見ると、

人の一生は重荷を負ふて遠き道を行くが如し。急ぐべからず。不自由を常と思へば不足なし。心に望起らば、困窮

したる時を思ひ出すべし。堪忍は無事長久の基、怒は敵と思へ。勝つ事ばかり知りて負くる事を知らざれば、害其の身に至る。己を責めて人を責むるな。及ばざるは過ぎたるに勝れり。

とある。是程の敎を遺した家康も、豐臣家は餘程氣懸であつたと見えて、之を滅すことを急ぎ、無理な難題をいひかけた爲に、後世に家康嫌の人を多く作ることとなつた。其の難題は京都方廣寺の鐘銘一件である。

方廣寺の鐘銘事件　方廣寺は、既に述べた通り、天正十四年秀吉が建てたもので、高さ十六丈の大佛(木像)を安置した寺である。然るに其れより十年後の慶長元年七月十二日、地震加藤で有名な大地震の爲に、其の大佛が壞れてしまつた。秀吉は之を再建する積りであつたが、其の志を果さずして同三年に薨じた。關原の戰爭後野心の益々高まつた家康は、秀頼母子に勸めて大佛を再建させることにした。表面は秀吉の遺志を繼がせる爲の勸であるが、其の裏面には大阪城の金穀を費させて豐臣家の財力を弱めようとの惡巧が潛んでゐたのである。さうとは氣附かず秀頼母子は大いに喜び、同七年に大佛銅像の鑄造にかゝつた。かくて同年十二月略其の工事が終つて、銅像の胴體に其の首を鑄着ける時、火が胴内の支の材木に燃移つた爲に大火事となり、折角の銅像は熔け、堂は燒失せた。其れが爲に再建工事は一時中止となつた。此頃秀頼は既に正二位に陞つてゐたが、翌八年(家康が將軍になつた年)四月十一歲で内大臣に任ぜられた。すると家康は秀吉の遺言によつて將來秀頼の夫人となるべき秀忠の女千姬(千代姬と)を大阪城に遣した。千姬は淀君の妹德姬の腹であるから、秀頼の從弟で、此の時は僅に七歲であつた。こんな子供を急いで大阪に送つたのも、家康が豐臣家を安心させる策略で、親密を裝ふ種にしたのである。さて朝廷は秀吉の舊功を重んぜられる所から、同十年四月には十三歲の秀頼を右大臣に任ぜられた。其の出世の早いことは、迚も他の大名とは比較にならない。豐臣家大切と思ふ淸正等は大滿足。偏に秀頼の成長を樂しんでゐた。之に引きかへて家康は此の時既に六十四歲の老人。餘命も長くは無いとの心配から、早く豐臣家を滅したい。併し秀吉の舊恩を思ふ大名はまだ少くはない。其の上大阪城は天下の名城、城中には金穀の貯が豐であるから、うつかり手出しが出來ない。そこで又もや豐臣家の金穀を先づ減じようと考へて、同十三年片桐且元を駿府に呼寄せ、言葉巧に方廣寺の建立、幷に大佛の鑄造を勸めた。且元は大阪に歸つて秀頼母子に

此の旨を傳へ、相談の末再び之を造營することとし、片桐且元が總取締となつて同十五年六月に工事を始めた。無論豐臣方の者も家康の心中を全く知らなかつたのではない。現に淀君の侍女（君の乳母）大藏卿の子大野治長の如きは「德川家で左程大佛が望ならば、將軍家で建てられるがよい。今の秀賴公の御身の上では容易ならざる大工事である。」と反對意見を申出したのである。併し何分にも此の頃は德川の勢は頗る盛で、萬一家康の心に背く樣なことがあると、忽ち三成同樣の目に逢ふとの心配から、兎に角家康の存生中は其の機嫌を損じない樣にし、時節を待つて豐臣家の勢を恢復しようと思ふ者が多數であつた爲に、方廣寺再建の議も決したのである。すると家康は工事監督として五人の家來を上洛せしめた。

福島正則の墨縄話　關原の戰爭後、家康は所謂外樣大名にも功に應じて大祿を與へたが、それと同時に其の財產を減じて、德川家に反抗する實力の無い樣に仕向けたものである。卽ち盛に城の普請を始め、主として外樣大名に其の工事を引受けさせた。伏見城、二條城の修築工事は勿論、井伊家の爲の彥根の築城に至るまで、諸大名に手傳はせたのである。名は手傳であるが、費用も悉く分擔させられたのである。併し德川家の信用を受けたさに進んで其の工事を引受けるといふ次第であつた。慶長十一年の江戸城の增築、同十二年に出來た駿府の築城の如きは、一は將軍の居城、一は家康の隱居所であるといふ譯で、家康から「滿足に思ふ。」とか、「骨折であつた。」とかいふ文言の書付の下がるのを樂み、或は葵の紋の附いた衣服、刀などの褒美を貰ふのを心待にして、晝夜も分たず、費用も惜まず、一生懸命に工事を急いだものである。其れを良い事にして家康は同十五年正月、子義直の爲に名古屋城を築くこと、し、豐臣方の大名二十六人に其の工事を命じた。何れも例によつて一心不亂に工事を急いだ爲に、主要の部分は翌十六年に出來た。併し中には不平を持つてゐた者もあつたのである。卽ち何時も城普請を命ぜられて來た福島正則、加藤清正、池田輝政などが、普請中寄合つた時、正則は輝政に向つて、「御互にかく年々城普請を手傳はされては迷惑至極である。江戸、駿府などは將軍家や大御所（家康）の居城であるから致方も無いが、さもない城まで手傳はされるのは如何かと思はれる。幸ひ貴公は大御所の御親類（初め北條氏直の夫人であつた家康の女は、氏直の歿後輝政の妻となつたのである。）であるから、折を見て此の趣を申上げて貰ひたい。」と曰つて愚癡をこぼした。すると側にゐた清正は「正則殿の御意見は一應尤もであるが、目先のきかないことではないか。今普請の手傳を嫌ふならば、早速領地に歸つて籠城する覺悟が無ければならない。さもなくば兎や角曰はずに手傳をするより外はあるまい。」と注意した。流石短氣な正則も「成程」と合點して其の場は濟んだ。然るに輝政が此の事を家康に話したものか、後に是等の人々が家康の前に出た時に、家康は「聞けば年々の手傳を迷惑に思ふ人もあるさうだが、左樣な人は遠慮なく國元へ歸つて貰ひませう。」と曰渡した。一同は恐縮するばかりで、不平らしい顏付をする者も無かつた。家康の權幕は之程であつたから、諸大名の工事監督役であり、又城中最も重要なる天主閣を引受けた清正の如きは、隨分其の工事に念を入れたもので、大きな石を運ぶ時には清正自ら木遣の音頭を唱へて人夫を勵まし、

石垣を積む時には、清正獨特の秘法を用ひる爲に、幕を張つて他藩の者には其の積方を見せなかつたのである。かく念入に築き上げた五層の天主閣の頂きには、今も金色燦爛たる金の鯱を据ゑたのみならず、最下層の穴藏には御金倉、及び其の他の倉庫は勿論、井戸、料理場をも設け。尙穴藏の入口一面には鉛の瓦を敷きつめて、萬一の場合には銃丸の材料にあてるといふ樣に、籠城の時の用意までしてゐたのである。是等の事を考へると家康が城普請の爲に豐臣方の大名に費させた金高は大したものであつたに相違ない。

又江戸に在つた大名屋敷も、初は極めて質素なものであつたが、嘗て家康が「江戸も京都、大阪の如く繁昌させたいものだ。」と曰つた所が、此の一言が諸大名の耳には餘程強く響いたものと見え、何れも其の屋敷の增築或は新築の工事を起して善美を競ふ樣になつた。其の頃今の參謀本部の處に在つた加藤清正の櫻田屋敷の表門の上には金の虎を置いたものであるが、旭、夕日に輝き渡つて、仰ぎ見るも眩く、其の光が遠く海上にまで及ぶ爲に、品川の海の魚類が少くなつたとの噂が立つたのである。して見ると家康の御機嫌取には隨分金がかゝつたものゝ言はなければならない。

御三家　名古屋の城主義直(家康の第九子。敬公)が親藩の筆頭尾張德川の藩祖で、慶長十四年に水戸德川の藩祖となつた賴房(家康の第十一子。威公)、及び元和五年に紀伊德川の藩祖として和歌山城主となつた賴宣(家康の第十子。龍公)と並べ稱せられた人である。以上尾張、紀伊、水戸の德川家を御三家といつて、何時定めたかは分らないが、後には將軍に後嗣の無い場合に、其の候補者を出すべき資格ある家となつた。

秀賴上洛、家康に對面す　慶長十六年三月六日家康は駿府を出發して京都に上り、使を大阪城に送つて、「秀賴殿には官位も昇り、年も既に十九歲の御成人であるが、まだ一度も參內せられたことがない。又德川家と御親類になつてから、はや九年にもなるが、其の後一度も御目にかゝらないことを遺憾に思ふて居る。此の際上洛して參內もせられ、家康と對面もして、兩家の親睦を堅くする樣にして貰ひたい。」と申入れた。所が淀君は秀賴の身の上を心配して之に應じなかつた。すると家康は加藤清正、淺野幸長を召出して、秀賴の上洛對面を促した。兩人は大阪に下つて此の旨を淀君に傳へ、「今家康公の言葉に背くのは豐臣家の不爲、多くの日數を費しては御心配も强からうと思はれますから、參內は御見合せになり、豐國大明神御參拜の序の對面として秀賴公御上洛の儀御聽屆に預たい。さるかはり、我々兩人御供を爲し、無事の御歸阪御引受申上げます。」と誓つた所から、淀君も漸く承知し、同月二十七日を大阪出發と定めた。當日秀賴は清正、幸長等と船に乘り、兩家の武士が兩岸を警護して居る淀川を溯つて伏見に着し、翌二十八日輿に乘つて二條城に向つた。清正は秀賴成人の樣子を人々に見せようとて、故ら輿の左右の戸を開き、幸長等と共に徒步で御供をした。其の行列を觀ようとて出て來た老若男女は、僅か百人斗の御供を隨へた平大名同樣の行列を見て、太閤繁昌の昔と想ひ比べ、「變れば變る世の中」と私語いで、涙を流したと謂ふことである。さて秀賴は京都に入り、片桐且元が屋敷に立寄つて、裝束を着かへた上、二條の城に向ひ、德川、豐臣兩家の武士が警固して居る城門を經て玄關に至り、家康に出迎へられて座敷に通つたが、清正だけは御附添として秀賴の側を離れなかつた。對面の挨拶に續いて、秀賴から德川家への進物を差出すと、家康は酒を出させて盃を取りかはし、秀賴に對する進物をも差出した。饗應が終ると、清正は「秀賴公始めての遠出でありますから、淀君殿が其の歸りを待詫びて居られます。御暇を申上げます。」と曰つた。やがて秀賴は家康に見送られて

城を出で、工事中の方廣寺にも立寄り、豐國神社にも參詣の上、伏見に至り、淀川を下つて大阪に歸着した。嘗淀君は喜んだであらう。清正は自分の屋敷に歸つた後、懐中に隱して居つた短刀を取出して、「今日太閤の御恩を報ずることが出來た。」と曰ひ、尙秀頼の無事を祈つてゐた愛宕神社に向つて禮拜したといふことである。日の出の勢の家康が秀頼に對面を求めたのは、心懸りの秀頼の樣子を見る爲で、まさか之を其の場で殺すやうな卑怯な心は持たなかつたであらうが、豐臣方では非常に心配したのである。家康は秀頼を見送つた後本多正信に向つて「秀頼の容貌、態度は實に立派で、他人の指圖を受ける樣な人相では無い。太閤の志を繼ぐべき人らしい。」と賞讃すると同時に、將來氣懸りになる人物だといふ意味の言葉を洩らしたといふことである。併しさあらぬ體で同年四月二日子義直、賴宣の二人を使者として大阪に送り、秀頼の上洛に對する御禮として、多くの進物を贈つた。二人が大阪から歸つて（四月五日）後間もなく、後陽成天皇の皇子が立つて第百七代後水尾天皇となられた（四月十二日）。家康は其の御儀式を拜觀した上、駿府に歸つた（同月廿八日）。

加藤清正の病死　家康が駿府に歸つて後、清正は領地の肥後に歸つたが、病に冒され終に慶長十六年六月二十四日に亡くなつた。時に年は五十歳。豐臣家の運命の衰へかけた時に此の人を失つたのは、秀頼の爲に惜みて餘あることである。遺言に從ひ、死骸には甲冑、武器を着けて葬つたといふことであるが、其の墓は今も熊本市外に在つて、殆んど年中參詣者の絶間の無い本妙寺の奥殿となつて居る。其の側に朝鮮人金官の墓があるが、之は清正に隨つて歸化した韓人が清正病死の時、其の德を慕うて殉死したからである。又同寺境内の寶物館には御題目を書付けた紙を捻り、其の紙捻を以て編んで長烏帽子や、秀頼の御供をした時に、懐中に隱してゐたものだといふ短刀など清正の遺物が澤山陳列してある。又清正が慶長六年以來六年間を費して築いた熊本城は後に細川忠利（忠興の子）が清正の子忠廣に代つて城主となつた時（寛永九年）から細川家の城となり、明治以後熊本鎭臺の營所となつてゐた。明治十年の西南戰爭の時、城の大部分が燒失せた爲に、今日人目を惹く建物は宇土櫓だけといつてよい。今第六師團司令部となつてゐる處の傍に、舊の天主閣の址が殘つて居る。それは兎に角清正は智、仁、勇の三德を備へた名將であつたから、今、熊本市内の加藤神社に祀られ、明治四十二年には從三位を贈られた。若し清正の子忠廣が利口な人であつたならば、豐臣家の助けになつたであらうが、忠廣は不肖の子で一向役には立たず、三代將軍家光の時（寛永九年）幕府の疑を受けて領地を取上げられ、出羽の莊内（山形縣鶴岡町南一里の丸岡村）に流されて五十七歳で病死した（後光明天皇の承應二年）。今山形縣鶴岡町本住寺の境内に忠廣及び其の母の墓があり、又清正及び忠廣の遺物と傳ふる物が同寺の寶物になつて居る。其の中にも清正が秀頼を守つて二條城に行つた時懐に隱してゐたのだといふ短刀があつて、今は年に一度しか觀せないことになつて居るが、どちらが眞物か分らない。

さて方廣寺の工事は慶長十七年三月に至つて成就した。其の大佛殿は高さ十五丈、東西は十六丈、南北は十七丈。中に安置した大佛の高さは六丈三尺で、舊に勝る立派な寺が出來たから、序に梵鐘をも造ることとし、同十九年四月重さ一萬七千貫の巨鐘を鑄、之に僧清韓が作つた銘を彫りつけた。そこで家康とも打合せた上、同年八月三日を以て大佛開眼供養の式日と定めて其の用意に取掛つた所が。茲に思懸ない手落が棟札にあつた。棟札と

は家を建てた時、其の建築に關係した重なる人々の姓名や、落成した年月日などを書付けて棟に納める札である。然るに清韓が大佛殿の棟札を書く時に、大野治長が「大工の棟梁や、德川家が送られた五人の工事監督は、何れも大した身分でもないから、わざ〳〵其の姓名を書くには及ばない。」と指圖した爲に、之を省いてしまつた。其れを遺恨に思ふた大工の棟梁は、棟札並に鐘の銘の寫を駿府に送つて、「方廣寺の再建は德川家の滅亡祈願の意味ある爲か、五人の工事監督の名を棟札に書いて居りません。」と訴へた。豫て事あれかしと待つてゐた家康は日頃信用してゐた學者林信勝（道春羅山）に銘を調べさせた。信勝は學者にも似合はず、家康の意を迎へて、故銘に瑕瑾を拵へようとした。幸にも銘の中に『國家安康』『君臣豐樂、子孫殷昌』などの句があつた所から、「此の銘は德川家の爲には不吉の文で御座います。現に國家安康の句の如きは、大御所の御名を切離して居ります。」などと眞面目顔して申出た。家康は大いに怒り、使を京都の所司代（關原の戰後に設けた役で、後倉時代の六波羅探題に當る役）板倉勝重に送つて開眼供養の式を差止めさせ、尙京都に於て學者として有名な坊樣七人を呼出して銘の良否の詮議をさせる樣に申渡した。そこで勝重は八月二日使を且元に送つて「棟札の書方に疑はしいこともあり、銘にも國家安康など不吉の句があるからとて、大御所には非常の御立腹。明日の式は御延期に願ひたい。」と申込んだ。且元は不意の差止を聞いて大驚愕。「棟札も銘も共に僧清韓の筆で、秀頼母子の知らざる事。自分は固より無學の身で其の良否を辨へないが、萬一落度があるならば腹を切つても申開きを致しませう。御承知の如く招待に應じて既に集つた坊樣だけでも千人を下らず、近國からの參詣人も萬を以て數へる程の今日の有樣。不吉の文字は後日必ず之を改めて御詫をするから、明日の式だけは擧げさせて貰ひたい。」と頼んだが、勝重は「所司代の職に在りながら、大御所の御意に背く事を許しては幕府に對して申譯が立たない。」といつて取合はない。且元は詮方盡きて、急に式の中止を觸出し、早速大阪に歸つて事の次第を報告した。思懸けない難題を聞いて秀頼母子は勿論、城中一同は家康の不法を怒つたが、「兎に角此の際は先づ豐臣家に德川を呪ふ心の無い事を明かにする必要あり。」との相談が纏まり、且元は僧清韓と共に駿府に下つた。然るに家康は兩人に面會を許さず、本多正純等をして鐘銘一件を詰問させた。清韓は問に應じて一々辯解をなし「思ひもよらぬ難題を言懸けられるが、秀頼公は固より愚僧に於ても

德川家に恨は無い。何を苦んで故ら德川家に對して不吉の銘を作りませう。萬一國家安康に大御所を呪ふ意味ありと見るならば、君臣豐樂には豐臣家を滅す意味ありとも見られよう。何故ならば豐臣の文字が倒になつてゐるではありませんか。若し大御所を呪ふ爲の銘ならば豐臣家の滅亡を祈る樣な句は用ひません。」と曰つたが、正純は「君臣豐樂、子孫殷昌は豐臣を君として子孫の殷昌を樂むと讀む下心に相違あるまい。」と曰つて承知しない。其の中に京都から七人の坊樣の意見書が駿府に到着した。見れば妙心寺の海山和尙だけは「清韓和尙は文章の大家。我々風情が其の良否を決するなどは思寄らざる事である。强ひて惡意ありと思へばありとも言へようが、和尙が故ら惡意を挾む銘を作つたとは思はれない。天下の太平を祈り、佛の功德を顯す爲に、目出度い文字を用ひたものに相違あるまい。」といふ意見を述べてゐたが、他の六人は豫てより清韓の文才と豐臣家の尊敬とを嫉んでゐた所から、皆家康に諂つて「不吉の銘なり。」としてゐた。のみならず例の棟梁が奈良の興福寺外三箇寺の棟札の寫を駿府に送つて、大工頭の名を書くべき證據物とした。これ幸と家康は益々怒つて、清韓に「歸京の上蟄居すべし。」と命じた（後清韓は紀伊に遠ひやられて元和七年に亡くなつたといふことである。）。大阪では家康の立腹が意外に甚しいことを知り、淀君は心配の餘、大野治長が母大藏卿と正榮といふ尼を駿府に下らせた。二人は到着の上、人を經て、鐘銘の落度御詫の爲に參上したことを申入れると、家康は其の翌日二人を城中に入れて快く面會し、秀頼母子などの健康なことを聞いて、滿足の體を裝ひ、豐臣、德川の兩家は切るに切られぬ緣ある親類。秀頼母子に野心のあらう筈はない。併し家來共の不心得から浪人を集めて戰爭の用意をして居るといふ噂。此の際惡者を却けて親睦の證據を示して貰へばよいと傳へて下さい。細かな事は且元に指圖をするから、心配せずに江戸見物でもして歸るがよからう。」と事も無げに話した。二人は大いに喜んで江戸に下り、秀忠夫婦の機嫌を伺つた。かく家康は淀君の使ひに對しては立腹の樣子も見せなかつたが、且元に對しては故の通り正純等をして「鐘銘の不都合は之を赦すとしても、近來大阪に於ては頻りに浪人共を召集めて穩かならざる企をして居るとのこと、大御所存生中既に斯の如くであれば、後日は尙更氣懸りである。早く兩家和親の實を示して、豐臣家の安全を圖れ。」と曰せた。且元は「兩家和親の實を示すに就ての大御所の御望を承つた上、如何樣にも盡力致しませう。」と答へたが、正純等は

「それは貴殿に御委せ申す。」と曰つて取合はない。そこで且元は苦心の末、三つの案を考へて、正純の意中をさぐつた。

第一案　淀君（秀忠の夫人の姉）を江戸に住まはせる事。

第二案　秀頼が夫人（秀忠の女）と共に江戸に住む事。

第三案　秀頼が大阪城を去つて他に移る事。

正純は「三案の中、どれか一つを實行すれば、大御所の怒を解き得るだらうと思ふ。」との意をほのめかした。かかる間に曩に江戸に下つた大藏卿等は駿府に歸つて來た。すると家康は且元と共に之を城中に呼出して「德川家に對して和親の實を表はす樣に取計つて貰ひたい。」と申渡し、進物を渡して大阪に歸らせることにした。大藏卿は直ちに出發したが、且元は病氣の爲に後れて出發した。併し近江の土山で大藏卿に追着いた。問はれるままに且元は、前の三案中の一つを實行しなくては家康の怒の解けないこと、及び三案の中では第一案を承知するより外に道の無いことを物語つた　二人の女は顏見合せて大いに驚き、「先日の大御所や將軍の樣子では、左樣な無理を曰はれようとは思はれない、察する所且元は德川方となつたに相違なし。」と思込み、其の夜竊に出發し、大阪に歸つて事の次第を淀君母子に告げた。淀君は「自分を女と侮つて江戸へ質に送らうとは不屈至極な且元。」と立腹し、秀頼も「母君を江戸に送つて恥を殘すよりは、城を枕に討死するが上分別。」と曰つて腹を立てた。大野治長は方廣寺再建の評議以來且元を憎んでゐた所であるから、「且元は豐太閤の御恩を忘れて家康に諂ふ不忠者。生かしては置かれない。」と曰出した。

さうとは知らぬ且元は大阪に歸り、秀頼に對面して前の三案を申述べたが、秀頼は聽入れず、淀君は對面も許さなかつた。且元は詮方なく自分の屋敷に下つたが、後に治長等は且元を城中に呼出して之を殺す相談を纒め、使を以て且元に登城を命じた。所が治長の計略を知らせた者があつた爲に、且元は病氣と稱へて登城を斷り、終に領地茨木（攝津國三島郡茨木町茨木）に退いた。家康は之を聞いて嘸喜んだであらう。曩に家康が大藏卿と且元とに對する態度を異にしたのは、開戰前に先づ且元を退けさせようとの惡巧であつたのである。

大阪冬の陣　大阪城中に於ては、愈〻德川家に對して兵を擧ぐるに決し、加藤、福島、毛利、黑田、池田、前田、島津等豐臣家に緣故深き大名に應援を求め、又頻に浪人を募つ

た。併し是等の大名は元龜天正以來打續いた戰爭に疲れ果てたる上、關原の戰爭以後家康の恩威に服して之に反抗する勇氣無く、殊に我が子孫の長久を圖る爲めには、寧ろ德川家に忠義を盡すが得策と心得てゐたから、一人も大阪に味方する大名は無かつた。然るに關原の戰以後殊に多くなつてゐた扶持放の浪人連中は事あれかしと待構へてゐた所から、募に應じて續々大阪に集り、眞田幸村、後藤基次、塙直之。薄田兼相以下九萬餘に達した。

十月一日京都の所司代板倉勝重は事の次第を駿府に急報した。

是より先、家康は豐臣家に緣ある大名連中から『兩御所（家康父子）に對して二心無きこと、及び上意に背く者の相談に與あざること』の誓書を出させて、出陣の決心をしてゐたが、報を得るや直ちに使を江戸に送つて秀忠に出馬を命じた。此の時福島正則、黑田長政等は從軍を願出たが、秀忠は萬一を慮つて譜代大名の一部と共に江戸の留守居を命じた。かくて家康は十月十一日駿府を出發。同月二十三日京都二條城に入つて秀忠を待ち、秀忠は同日江戸を出發し、十一月十一日京都に上つて家康に對面の上十五日を出陣の日と定めて伏見城に入つた。

大阪城に於ては戰爭の手始に先づ且元を攻めようとしたが、板倉勝重が援兵を茨木に差向けたことを知つて之を中止し、東軍に對する評議を始めた。眞田や後藤は東軍が京都に入るに先立つて、伏見や京都を占領し、宇治、勢田邊に兵を出す策を述べたが、治長等は之を用ひずして籠城することに定め、城の內外の要所々々に兵を配つた。

家康は豫定の如く十五日京都を發し、奈良、法隆寺を經て住吉に進み、秀忠も同日伏見出發、枚方を經て平野に着し、住吉に行つて家康の指圖を受け、愈〻城の攻擊に取懸つた。家康は眞田幸村を味方にしようと考へて使を遣り「志を飜して德川方になるならば、信濃に於て一萬石の領主に取立てよう。」と申込ませた。幸村は「既に豐臣家に召出されて多くの兵を授けられ、一方の大將をまで仰せつけられて、過分の名譽と心得て居るから、折角の御申込にも從ふことは出來ない。」と斷つた。使が此の旨を告げると、家康は其の志に感じ、更に使を送つて「信濃一國を與へるから、味方に附いて貰ひたい。」と言はせた。併し幸村は「不肖の身に過分の御上意。尤くは存ずれども、一旦秀賴公の御賴を受けながら、一身の利益の爲に約束を破つては、武士の面目が立ちません。萬一御和睦にで

もなる時には、信濃は下さるには及びません。御使者の御扶持を分けて下さるなら、身命を抛つて御奉公も致しませう。其の時までは假令日本の半を下さるとも御味方は出來ません。」と刎ねつけた。幸村の如きは實に武士の龜鑑と謂ふ可き人である。

さて東軍は日を經るに隨つて城に近寄り、十二月四日秀忠は陣を城南の岡山に進め、家康は同月六日本陣を其の西の茶臼山に移した。併し城は天下の名城たる上に、眞田、後藤以下城中の者は死力を盡して應戰し、屢々東軍を惱ました。家康は徒に多くの味方を失ふことを恐れ、使を城中に入れて和睦を勸めたが、秀頼は之に應じなかつた。東軍は當時の狂歌の示す通り

東武者破車の如くにて
　引くもひかれず乘りものられず

といふ有樣であつたのである。秀忠は頻りに總攻擊をと願つたが、家康は之を許さず、此の時既に家康の勸によつて東軍に加はつてゐた片桐且元の陣地備前島が城に近いのを仕合として大砲の名手を其處に送り、天主閣あたりに向つて發射させた。狙違はず砲彈は或は天主閣に命中し、或は淀君の頭上に爆裂して其の侍女を殺した爲に、淀君は急に秀頼に向つて和睦を勸める樣になつた。かかる所に家康は又人を城中に入れ、「但馬、石見あたりから呼寄せた鑛山の工夫は地下に孔を鑿つて城に近づきつつあり、又石垣に立懸けて昇るべき梯も澤山出來て居るから、今にも總攻擊を始める手筈になつて居る。何を頼みに籠城せられるか、今の內に和睦を申込めば、豐臣家は舊の如く取扱はれるであらう。」と嚇しかけた。怖氣のついた淀君は益々恐れて頻に秀頼に和睦を迫つた。秀頼は已むを得ずして之を承諾し、『豐臣、德川の兩家は互に舊の如く親密に交り、又今度籠城した浪人どもに對して、德川家は何の苦情も申立てない。』といふ條件で和睦することにした。家康は固より望む所であるから異議のある筈はない。十二月二十一日に德川家は誓の證書を豐臣家に渡し、其の翌日秀頼は家康に對する誓書を渡した。此の戰は十一月に始つて十二月に終つたから、季節に因んで大阪冬の陣と謂ふのである。

家康の惡智慧　冬の陣の和睦は目出度い和睦ではなかつた。秀頼は心ならずも淀君に迫られて之を承知したが、浪人連中は不同意で、現に眞田幸村は誓書交換の終つた日（十二月廿二日）

家康父子の陣に夜討をしようと勸めた程である。併し淀君が之を聽かなかつた爲に、實行しなかつた。一方家康はどうかと言へば、固より和睦したさの和睦ではなく、大阪城の防禦力を弱めようとの野心に基く和睦であつたのである。夫故再和談判の際、家康は「大阪方の無事を祈る爲に、城中の申出に對しては少しの異議も申立てずに和睦をしよう。併し我々父子は遙々駿府や江戸から出馬したのであるから、何の記念もなく軍を退けることは出來ない。幸にも和睦が纏つたからには不用と見るべき大阪城の總濠を塡めて和親の實を示して貰ひたい。但し之を塡める手數までを煩はすのは氣の毒であるから、其の人夫は徳川方から差出し、其の指圖も東軍で引受けよう。」と申入れた。總濠とは外濠の意味である。假令外濠だけにもせよ之を塡めることは大阪城の大損害である。然るに淀君は和睦を喜ぶ餘り、城の將來を考へることもせずして、之に同意した。誓書にも書かなかつた此の口約束が家康に取つては最も大切な條件であつたのである。之が豎臣家の滅亡を早める種になつたのである。

家康は誓書交換の翌日（廿三日）から本多正純等を指圖役として總濠埋立の工事に着手せしめ、秀忠に其の監督を命じて置いて、同月二十五日正純の父正信等を連れて大阪出發、京都二條城に入つて、元和元年の正月を迎へた。正純等は數萬の士卒を指揮して櫓、塀、石垣などを破壞し、先づ外濠を塡めさせた上、更に内濠の埋立を始めた　城中の者が驚いて其の不法を責めると、正純は「私が父から受けた命令は、總濠の埋立であるから、濠全體で、總構の濠だけでは無い。併し異論があるなら父に交渉して貰ひませう。」と曰つて取合はない。そこで秀頼は使を京都に遣つて本多正信に違約を責めた。正信は「愚鈍な倅が命令を誤解したに相異ない。早速大御所に申上げた上で何とか御挨拶をしたいが、生憎病氣で服藥して居る際であるから、二三日の御猶豫を願ひたい。」と答へて、使を待たせて置いた。其の間に大阪では内濠までを塡めてしまつた。其の後、正信が大阪からの詰問を取次ぐと、家康は驚いた風を裝ひ「秀頼の立腹は道理至極。使を返した上、其方は大阪に下つて御詫をしろ。」と申付けた。正信が大阪城に行つて見ると、既に壕は全部埋められて、人夫の影も見えない。正信も亦大いに驚いたらしく見せかけて「斯樣な不始末を致したのは全く粗忽な悴の誤解の爲で何とも申譯はありません。之を舊通りにするには人夫の數も埋

立工事の十倍もかかつて非常な手數であり、又旣に和睦も出來た後であるから、再び兵を起す御心さへなくば、壕は無用のものであると思召して御勘辨を願ひたい。」と御詫した。城中の者は始めて家康主從申合せの惡巧を悟つて、大いに其の不法を憤り、再擧の決心をする樣になつた。鐘銘事件といひ、總壕事件といひ、不都合極る家康の行を見て之を憤る者は浪人ばかり、嘗て豐臣家の御恩を受けた大名連中が、知つて知らざる風に過したことを思へば、當時德川家の勢力が如何に盛んであつたかが分り、又祿に依つて生活する者は存外意氣地の無いものであるといふことが分る。

大阪夏の陣　元和元年正月三日家康は京都を出發して駿府に向ひ、秀忠は同月十九日大阪を引上げて先づ伏見城に入り、更に京都の二條城に移り、同月二十八日江戸に向つて京都を出發した。併し兩人共に大阪の樣子が氣懸りであつたから、故ら道中に日を費し、家康は二月十四日駿府に、秀忠は同月十六日江戸に歸り着いた。

大阪に於ては、德川家の不法を怒り、再び浪士を募つて再擧を圖り、總勢十五萬と號する兵を集めた。併し城は以前と異り、濠もなければ、二の丸も、外郭も破壞された後、唯本丸が寂しさうに聳えて居るばかりである。嘸秀頼等は悔しく思ふたことであらう。さて大阪の企は四方に傳はつて「大阪方は京都の市街を燒拂つて、之を戰場にするさうだ。」といふ樣な噂まで立ち、京都の人々は家財を比叡山、鞍馬山、愛宕山などに運ぶ程になつた。所司代板倉勝重は大阪の不穩を駿府に通知した。豫てよりかくあるべしと待構へてゐた家康は心竊に之を喜び、江戸の秀忠に出陣の命令を傳へて置いて四月四日駿府を出發し、十八日京都に着して二條城に入つた。秀忠は同月十日江戸出發、二十一日伏見着、翌日二條城に行つて家康と軍議を定め、總勢十五萬の東軍を二軍に分ち、一軍は大和を經、他の軍は河内を經て大阪に向はせることとした。同月二十六日兩軍の先鋒は京都を出發し、之に續いて他の隊も進軍を始めた。其の頃家康は人を大阪に遣つて、「若し秀頼が浪人を逐拂つて一時大和の郡山に移るならば、德川家は戰はずして兵を引上げ、尙七年の間に大阪城を修理して、之に歸らせることにしよう。」と告げさせた。併し秀頼は旣に家康の言葉の信用すべからざることを知つてゐたのみならず、必死の籠城を覺悟してゐたから、之に對して何の返答もしなかつた。是より先き城中では曩に塡められた壕址を二尺許掘起し、舊

の塀址などには柵を設けて防禦の用意はしてゐたが、固より舊の大阪城の半分の强味も無い。そこで城外に於て雌雄を決することとし、後藤基次、薄田兼相等は大阪の東南四里許の道明寺（河内國南河内郡道明寺村）方面に出陣して大和口を固め、木村重成は大阪の東方約三里の若江（河内國中河内郡若江村）方面に進んで河内口を守ることとした。

五月五日家康は京都を、秀忠は伏見を發して河内街道を進み、其の夜河内の星田（北河内郡星田）に着して軍議を凝らし、明くるを待つて道明寺方面に向ふこととした。翌六日後藤基次は大和口から攻寄せた東軍と戰ひ、屢之を惱ましたが、武運拙く、終に敵彈に中つて斃れた。之に代つて薄田兼相も激しく戰つたが、衆寡敵せずして戰死した。所へ眞田幸村が進み來り頻りに東軍を苦めてゐると、城中から若江方面の敗軍を傳へて、退却を命じた。幸村は直ちに兵を集めて引上げたが、東軍中一人も之を追擊しようとする者が無かつた。

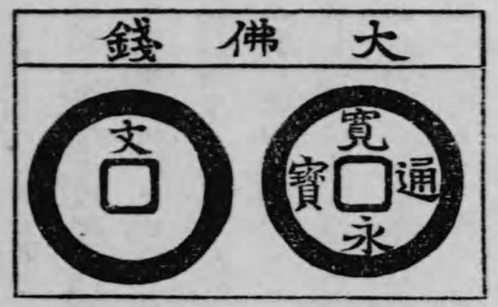
さて木村重成は同日（六日）兵を八尾（中河内郡八尾町）、若江方面に配つて、道明寺に向はんとする東軍の側面を攻擊することゝし、自ら若江に進んで井伊直孝の軍と奮戰した。然るに八尾方面の味方は東軍の先鋒藤堂高虎に破られ、若江の軍も敗北して大半は逃出した、しかも重成は奮鬪を續けて終に勇ましく戰死した。時に年は二十三歳。其の墓は今も若江村にあつて、長門守木村重成之墓と彫りつけた石碑が立つて居る。此の戰に重成は討死の覺悟をしてゐたから、出陣前に風呂に入つて髪を洗ひ、其の上香を焚きしめて置いた。爲に其の首を實檢した家康は重成の心懸に感服したといふことである。

七日家康、秀忠は大阪城の東南凡そ二里の平野（摂津國東成郡平野町）に至り、東軍は頻りに南方より大阪に向つて進んだ。幸村は茶臼山に陣し、兵を其の東の天王寺、及び岡山方面に配置

して之を防ぎ、同時に城中の秀頼に對しては其の出陣を勸めた。之は眞田が最後の計略で、秀頼が陣頭に立つて戰ふならば、もと秀吉の御恩を受けた藤堂、伊達など東軍の大將連中も流石に昔を想ひ出して其の戰鬪力が鈍るだらうと見込んだからである。所が其の頃家康が窃に胸を痛めてゐたのも、秀頼の出陣と、千姫（秀頼の夫人）の身の上とであつた。「若しも秀頼が最後の一戰を思立つて自ら城外に出るならば、豐臣家に舊恩ある部下の者共は、戈を倒にして自分に向はないとしても、路を開いて秀頼の軍勢を易々と我が本陣に近づかせないとは限らない。若しそうなれば疲れた味方は死物狂の新手を退けることは出來ず、其の中に裏切をする者が出來るかも知れない。」と心配の餘り家康は復も惡智慧を搾り出し、手紙を大野治長に送らせて「大阪方の大將中には、秀頼に出陣を勸めた上、之を東軍に渡し、其れを手柄に自分の助命を願ふ下心の者があることを内通した者がある、萬一左樣な勸を用ひられる場合には助けたくとも助けることが出來なくなる。元來今度の旗上も浪人共の企てで、秀頼の本意でないことは疾くより承知致して居る。誰が何と曰はうとも城中に在つて運の開けるのを待たれるがよい。」といふ意味を告げさせた。城中では秀頼が愈々出陣しようとして居る所に此の書面が届いた。治長は之を見て半信半疑、其の判斷に苦しみ始めた。所に幸村からは頻に「御出馬あれ。」と催促して來る。治長は遂に家康の術中に陷つて秀頼の出陣を中止した。幸村は待てども待てども秀頼の出陣無きを見て、「さては某を疑はれるに相違なし。」と、子大助（幸昌）を城に送つて人質とし、猶も出馬を促した。併し最早治長の決心を動かすことは出來なかつた。そこで幸村は「此の上は力及ばず。」と諦めて奮戰し、終に四十六歳で討死した。大阪方は總崩となつて城中に逃込み、家康は茶臼山に、秀忠は岡山に陣を進めた。時に城中の料理人頭が東軍に内應して火を臺所に放つた。東軍も城内に亂入して所々に放火した爲に、烟は天を蔽ふばかりの有樣になつた。秀頼母子は難を避けて倉庫の中に移つた。治長は千姫を城外に出し、秀頼母子の助命を頼ませた。家康には固より秀頼母子を助ける心は無かつたのであるから、翌八日の朝城に向つて鐵砲を擊ちかけさせた。城中の者は最早助命も望無しと觀念し、秀頼、淀君、治長、大助等は何れも自殺して、豐臣氏は滅亡した。時に秀頼は二十三歳であつた。秀頼の子國松丸は是より先乳母と共に伏見に隱してあつたが、捕へられて六條河原で殺され、他の一人の女の子

は落城の際、家來につれられて逃出したが、之も亦東軍の爲に捕へられた。併し命は助けられ、鎌倉の或寺に入り、尼となつて一生を終つた。千姫は此の時十九歳であつたが、自害もせず、尼にもならず、後に本多忠刻の妻となつて一生を送つた。七歳で大阪に送られたのであるから、武士の妻たる心得は敎へてなかつたのであらう。

片桐且元　は家康の籠絡する所となつて、冬の役以來其の手先に使はれてゐたが、固より豐臣家に對して惡意を持つてゐた譯ではない。一時家康に從つて其の機嫌を損じない樣にするのが、秀頼の安全を保つことになると思込んでゐたものらしい。然るに家康が豐臣家を滅したのを見て始めて自分の愚を悟り、大阪落城後駿府に下り、憂悶の極、病氣に罹つて五月二十八日六十歳で亡くなつた。嘗て賤嶽の合戰に七本槍の一人に數へられた且元も家康に騙されて果敢ない最後を遂げた。思へば氣の毒な人である。



方廣寺の鐘と大佛　大阪の役の種となつた方廣寺の鐘は今も京都の方廣寺に殘つて居り、其の銘の清書は京都で有名な筆墨商熊谷鳩居堂に傳はつて居る。大佛は四代將軍家綱の時（寛文二年）之を壞して大佛錢とか文錢とかいはれた錢に鑄かへ、木像の大佛を据ゑた。然るに此の大佛は十一代將軍家齊の時、雷火に罹つて大佛殿と共に燒失せた（寛政十年）。今ある半身木像の大佛は天保年中尾張國の人が納めたものである。

大阪城　豐臣氏滅亡後、幕府は大阪城に應急の修理を加へて松平忠明に與へたが、元和五年改めて之を幕府の直轄とし、大阪市内の政治、裁判などを掌る城代といふ役人を置くこと、した。かくて其の翌年から凡そ九年の間關西の諸大名に命じて大修築を施させた爲に、餘程立派な城になつた。併し其の後屢落雷や火事に逢つたから、今は僅に城門と二三の櫓が殘つて居るに過ぎない。

家康諸法度を定む　家康は秀頼自殺の日（八日）直ちに茶臼山を出發して其の夜京都二條の城に入り、秀忠は其の翌日（九日）伏見城に凱旋した。大阪の役以前、世間の人は「家康は老人であるから、秀頼よりも先に亡くなるであらう。さすれば豐臣家は復盛になるべきだ。」と推察して、

御所柿（家康）は獨り熟して落ちぬらん
　木の下にゐて拾ふ秀頼

と京都の町に張紙をした者もあつたのであるが、今は全く其の反對になつて、

憎むべし木から落ちたる猿の子を
　喰つて狸は腹皷うつ

と謂はれる樣になつてしまつた。さて家康が豐臣家に對すると同樣に日頃窃に心を惱ましてゐたのは、皇室と大名とであつた。朝廷の力が强くなつても、諸大名の勢力が盛になつても、幕府に取つては不利益であるとの考から、豫て林道春(信勝)等に命じて古來の制度を調べた上、德川幕府の安全を圖る爲の法令を作らせてゐた。幸ひ豐臣氏が滅亡したのを機會として、元和元年七月七日諸大名を伏見に召集して、大名の守るべき規律を申渡した。之が有名な武家諸法度で「文武兩道を勵むべし。」、「法度違反の者を隱し置くべからず。」、「國々の城の修理も必ず幕府の許可を受くべし。新奇の築城は之を嚴禁す。」、「隣國に於て徒黨を組み、或は新に何事かを企つる者あらば早速屆出づべし。」、「私に婚姻を結ぶべからず。」、「參勤の作法を守るべし。」といふ樣な事柄が十三箇條ある。又同年同月十七日家康は京都二條城に關白以下公卿を集めて、公家法度十七箇條を發布した。之は皇室幷に公家の守るべき規則で、「天皇は學問の修業が大切で、殊に和歌の稽古を棄てられてはならない。」とか、「安に紫の衣や上人號を坊樣に授けられてはならない。」とか、「親王の席次は三公(太政大臣と左右の大臣)の下にする。」とか、「武家の官位は公家の定員以外とする。」とかいふ樣な事柄をきめたものである。其の中には表面何事も無いやうで、實は裏面に深い意味の潛んで居る者が少くはなかつたのである。兎に角臣下が天皇の御事にまで立入つた規則を作つたのは、從來にない例である。自然後の世の人々は信長や、秀吉が皇室を尊崇したのと比べて一層家康を憎むのである。併し其の頃は誰一人家康を責める者は無く、家康父子も之で漸く安心したものと見え、秀忠は同月十九日伏見を發して八月四日江戸城に歸り、家康は此の日に京都を出發して、同月二十三日駿府に着した。

家康薨ず　元和二年正月二十一日家康は鷹狩に出かけた。所が豫て知合の宇治の茶師、茶屋四郎次郎といふ者が御機嫌伺に罷出て、問はれるままに「此頃京都では鯛の油揚の料理が流行で御座ます。」と答へた。折柄久能の城主(榊原照久)が鯛を獻上した爲に、之幸と家康は早速鯛の天麩羅を作らせて之を食べたが、喰過の爲か其の夜腹痛を起した。そこで手製の萬病圓といふ藥を飲み、二十四日駿府に歸つた。併し病氣は良くならない。城中では江戸に使を出すやら、醫者を呼ぶやら大騷であつたが、家康は醫者の藥を飲まないで、萬病圓ばかり飲んでゐた。二月二日秀忠が見舞に來ると、家康は「自分も今年は七十五歳。萬

一急に病氣が重れば、對面も出來なかつたのに。早く來てくれたのは何より滿足。」と喜んで、矢張萬病圓ばかり飲んで居る。秀忠は心配の餘、家康の最も氣に入りの醫者に申付けて「手製の萬病圓は劇藥であるから、若い者には兎も角、老人には危險である。是非我々の藥を御用ひ下さい。」と曰はせたが、家康は怒つて其の醫者を甲斐國に流させた（家康薨去の後、直ちに赦免となつた）。餘程萬病圓を信じてゐたものと見える。三月になると後水尾天皇は態々勅使を駿府に下して、家康を太政大臣に任ぜられた。すると家康は病中に拘らず禮服を着けて其の詔を拜受した。其の後日を經るに隨つて病氣は重くなるばかり、四月に入つてからは衰弱が殊に甚しく、到底全快の見込が無くなつた。夫と氣付いて家康も「自分の死骸は一時久能山（駿河國安倍郡久能村根古屋）に葬り、神として祀れ。其の式は神主や坊樣の手を煩はさずして日頃心安く召使つた久能の城主（榊原照久）に營ませて貰はう。かくて三年の間に下野の日光山に改葬し、其處にも小さな社を建てて祀れ。などの遺言をして置いて同月十七日に薨じた。そこで久能の城主は俄仕込に葬式の仕方を習ひ、遺言通り先づ久能山に葬り、後に其の社も出來た。病氣の本となつた鯛を獻上した人も、葬式係も久能の城主、其の上墓が久能山。

家康は餘程久能に因緣のあつた人である。秀忠は暫く駿府に滯在してゐたが、同月二十九日江戸に歸つた。翌三年二月朝廷は家康に東照大權現の號を賜はり、三月に正一位を贈られたが、其の頃は既に日光廟の工事も完成してゐた爲に、同月十五日改葬にかゝり、四月四日日光に葬つた。之が今も日光に在る奥の院である。其の頃の社は左程立派ではなかつただらうが、三代將軍家光の時、諸大名に手傳はせて大改築を爲し、工事に十三年の日子を費して、寛永十三年四月に成就した。之が所謂「日光を見なければ結構と云ふな。」の評ある東照宮で、此の宮號は第百九代後光明天皇が下し給はつたものである（正保二年）。其の後（正保四年）後水尾法皇の皇子（守澄法親王）が江戸忍岡の寛永寺（家康が信任した僧天海の爲に家光が建てた寺で、落成したのは寛永四年）に入られて以來、法親王が常に此の寺に居られて、日光東照宮の世話をしられたもので、之を輪王寺宮と云つたのである。其の後第百二十一代明治天皇の御代に（明治六年）日光の東照宮は別格官幣社に列せられ、久能山の東照宮も別格官幣社としられた（明治二十一年）。思へば家康は不思議に運の強い人である。秀吉が薨じて以後は屢々人の憎みを受ける樣な行をしながら、德川幕府が長く續いた爲に、其の時代には「權現樣、權現樣」と崇められ、明治の御代になつてからも、正成、

信長、秀吉などと同樣の資格ある社に祀られて居る。察するに家康は善かれ惡かれ長く天下の政治を委せた德川幕府の基礎を堅めた一大政治家であるからとの寬大な大御心によるものであらう。

家康の學問奬勵　家康は武藝については中々の達人。馬術、射擊(砲)は殊に得意とする所で、屢々人を驚かしたことがあり、戰術に於ては秀吉をして舌を捲かせる程の腕前を持つてゐた。所が一方に於ては幼少の時から學問にも心を寄せ、今川家に人質となつてゐた時にも坊樣を師匠として始終讀書に耽つてゐたものである。其の後も常に讀書を怠らず、天正十八年小田原征伐の後、始めて江戸城に入つた際には下野の足利學校にゐた學者を呼出して漢學の講義を聽き、秀吉の朝鮮征伐中、肥前の名護屋の本陣に詰めてゐた時にも、藤原惺窩といふ學者の講義を聽いたものである。所で其の頃の漢學者は多くは坊樣で(惺窩も初は坊樣)、詩や文章を作ることにのみ力を注いだものであるが、惺窩は專ら身を修め、國を治める道を說いた人で、世間の人は皆「惺窩先生」と呼んで尊敬してゐた程の人であつたから、家康も其の講義を聽いて大いに敬服し、關原の合戰後も屢々其の敎へを受けて、益々漢學の有難味を知つた。そこで家康は江戸の城中に富士見亭文庫といふ圖書館を造つて(慶長七年)諸處方々から書物を集め、其の中重寶なものは銅製の活字で印刷して發行した。此の文庫は後に(寬永十六年)名を紅葉山文庫と改め、明治以後終に內閣の管理に移つて今日に及んで居る。兎に角家康が書物を集めた熱心は驚くべきもので、民間の書物を集めた後には、京都の御所にある書物までを借受け、書の巧な坊樣を二條の城に集めて、どの書物も三部宛の寫本を作らせ、一部は原本と共に御所に納め、一部は富士見亭文庫に、一部は駿府城に藏めたものである。是等の仕事にも關係し、又漢學の講義もする上、幕府の政治の顧問として信任せられた學者は、有名な林道春で、惺窩の門人である。道春は德川幕府の爲には隨分骨を折つた人で、彼の公家及び武家の法度の草稿を作つたのも、方廣寺の鐘の銘にケチをつけたのも主として此の人である。自然道春は學者としては名高いが、あまり家康の意を迎へ過ぎたといふ譯で、後世の人には嫌はれて居る。

さて戰爭によつて天下を取つた家康が、學問の奬勵に力を盡したのは、單に自分が學問好であつた爲のみではない。長らく戰爭に疲れた世の中を平和に導く爲にも、幕府の安全

を圖る爲にも、學問の力を藉りて、父子、兄弟、朋友などの道を守り、主從の恩義を重んずる人間を作る必要を認めたからである。それには身を修め、家を齊へ、國を治める道を說く漢學を重んじなければならないといふ次第で、自分も或は惺窩を師とし、或は道春を顧問としたのである。是が爲に家康以後漢學は次第に盛になつたが、學問は漢學に限つたものではないから、後には我が國の古史、古文を研究して、日本特有の國體を說く國學者も出る樣になり、又日本の歷史を研究して皇室の尊嚴を說く學者も出る樣になつた。隨つて一時將軍あるを知つて天子あることを知らなかつた國民も次第に皇室の尊敬すべき所以を知り、遂に尊王の聲が天下に高まる樣になつた。此の尊王論が德川幕府を倒す一大原因になつたのであるから、家康に取つては實に意外の結果が生じた譯である。つまり家康の學問奬勵の目的は人民をして幕府に忠實ならしむるに在つたので、一時は其の目的を達したが、同時に人民が幕府をして皇室に忠實ならしめようとの心を起す種を蒔いて置いたことになつたのである。用意周到な家康も其處には氣が附かなかつた。之が所謂自業自得であらう。

二代將軍秀忠（台德院）　二代將軍秀忠は慶長十年以來元和九年まで十九年の間將軍職を勤めたが、家康の存生中は萬事其の指圖に從つて政治を行うてゐたものである。家康の薨去以後尙八年將軍職に居つたが、何事も家康の定めて置いた方針に從つて、之に背かない樣に心懸てゐたのである。今に至るまで秀忠を溫厚篤實と評するのは其の爲であらう。併し家康の方針は德川幕府の利益を本にして割出したものであるから、福島正則の處分といひ、和子（秀忠の娘）の入內といひ秀忠時代の主なる事柄が幕府本位になつたのは當然である。

福島正則の處分　福島正則は賤岳の七本槍の一人として名を知られた勇將で、秀吉の信任を受けた一人である。併し加藤淸正等と同じく石田三成を嫌つてゐたから、人を利用するに巧なる家康は、秀吉の薨去後間もなく自分の養女を正則の長子正之の妻とした（慶長四年）。正則は家康を豐臣家に對して忠實律義な人と思込んだ所から、關原の戰には其の先鋒となつて奮戰し、其の功によつて、戰後安藝、備後二箇國の領主に取立てられたのである。さりながら正則には秀賴を粗略に思ふ心は毛頭無かつたのであるから、大阪の役が起つた時にも、「此度の事は大野治長等が浪人共に唆かされて起したもの。秀賴の本心に出た事では

ないから、若し從軍を許されるならば、早速大阪城中に踏込んで治長等を處分した上、秀頼公に和睦を申込ませませう。」と願ひ出た。併し家康も秀忠も之を許さず、「留守番を頼む。」と曰つて江戸に封じ込んだ。此の頃から家康父子は正則を繼子扱ひにしだしたのである。かくして家康、秀忠が大阪に向つて出陣した後、正則は密に家來を幾人も東海道筋に出して置いて日々大阪の樣子を報告させ、東軍の苦戰を聞く毎に「太閤が心を凝めて造られた城だから、攻めあぐむのが當然だ。」と曰つて喜んで居た。然るに終に「御和睦」の知らせを聞くと、「南無三寶、してやられたか、殘念なり。」と大聲を揚げて歎息したといふことである。其の後大阪が落城してからは、世間の者が「福島は秀頼を見殺しにした意氣地なし。」と譏る惡口を聞きながら不愉快に其の日を送つてゐた。所が或年洪水の爲に正則の廣島の居城が破損した。そこで正則は元和四年五月歸國の許を受けて廣島に下つたが、出發前本多正純に對面して「歸國中に城の破損を修理し、其の序に二の丸、三の丸の塀、石垣も築き改めたいから、此の旨を將軍樣に御屆け下さい。」と頼んだ。正純は「折を見て申上げませう。」と答へた。さて歸國の後正則は復飛脚を正純に前同樣の願を申送つたが、正純は矢張「御願の趣は折を以て申上げます。」と返事した。そこで正則は翌五年正月に修理を始め、二月中に工事の大半が出來た爲に、三月には再び江戸に上つた。然るに正純は故廣島城普請の事を將軍に屆出てゐなかつた爲に、これ幸と幕府は使を正則の屋敷に遣はして「御許しなき城普請不屆至極に付領地を召上げ、津輕(陸奥)に於て替地を與へる。」と申渡した(六月)。許可を得なかつたのは正則の失敗とは云へ、無斷で普請をしたのではない。定めし不服であつたらうが、正則は最早辯解無效と觀念した爲か、「大御所(家康)が御存命ならば申上げたい事もあるが、秀忠公には何事も申上ぐるには及ばない。仰せの趣承知致しました。」と答へて、家財武器等を悉く使に差出した上謹慎した。流石の幕府も氣の毒と思ふたものか、津輕は餘りに不便だからといふ譯で、信州川中島に移して四萬五千石の地を與へた。正則は次男正勝と共に其の地に移つたが、正勝は父に先立つて病死し(元和九年)、正則も其の翌年六十四歳で病死した。遺言によつて家來が其の屍骸を火葬にした後に、幕府からの檢使が到着した。檢使は空しく立歸つて此の旨を言上し、幕府は「檢使も待たずに火葬にしたのは不屆だ。」といつて其の領地を沒收した。(是より先、慶長十二年に正則は「長男正之は精神病に罹つた。」と曰つて、其の妻を德川家に返

した上、之を殺してしまつた。正之は餘程父の怒に觸れることが有つたと見える）且元と云ひ、正則と云ひ共に豊臣家の爲を思ひながら、家康に籠絡せられて終に悲慘の最後を遂げた。兩人が愚直の爲と評する人もあらうが、寧ろ家康の腕が人並以上に凄かつた爲と見るのが至當であらう。さて幕府では正則の領地安藝、備後を取上げた際、其の頃和歌山城主であつた淺野長晟（長政の子で幸長の弟）を移して廣島城主とし、其の跡に秀忠の弟頼宣を封じた。之が前にも述べた通り御三家の一で、紀伊徳川の先祖である。

和子の入内　家康は存命中專ら徳川家の繁榮利益を圖る方針で萬事を目論み、大抵の事は仕遂げて置いて薨じたが、唯一つ仕殘しになつたのは秀忠の女和子の入内である。一體家康在世の時から既に徳川將軍家の勢は年と共に盛であつたが、家康は尙も徳川家の重みを增さんが爲に、孫の和子を宮中に納れて後水尾天皇の御后にしようと志し、此の趣を朝廷に御願ひ申した。

（一〇一）後花園天皇——（一〇二）後土御門天皇——（一〇三）後柏原天皇——（一〇四）後奈良天皇——（一〇五）正親町天皇——誠仁親王——（一〇六）後陽成天皇——（一〇七）後水尾天皇

（一〇八）明正天皇
（一〇九）後光明天皇

然るに後陽成上皇は「武家の女を宮中に納れた先例がない。尤も平清盛が其の女徳子を高倉天皇の皇后にしたことはあるが、其の時は徳子を後白河法皇の御養女といふことにして納れたのである。」と仰せられて御許しにならなかつた。けれども家康は之を斷念せず、藤堂高虎等をして其の御許を受ける樣に盡力させた所から、朝廷では更に御詮議の上、「昔源頼朝が其の女乙姫を宮中に納れんことを願つたことがある。乙姫が早く亡くなつた爲に入内はしなかつたが、御許を出された例がないではない。」といふので、家康の願を御聽届になつた。（慶長十九年）併し家康は和子の入内に先立つて薨じ（元和二年）、後陽成上皇も其の翌年崩御になつた（元和三年）そこで秀忠は父の志を繼いで元和五年に其の準備に取懸り、幸ひ高虎が藤原氏の子孫として親しく近衞家に出入して居り、又右大臣近衞信尋は先帝の皇子で近衞家を繼いだ方であつたから、高虎をして信尋と萬事の打合をさせた上、元和六年六月十八日和子を宮中に納れて後水尾天皇の后とした。後に第百八代明正天皇となられた興子と申す

（一一〇）後西院天皇
（一一一）靈元天皇

近衞信尋

皇女は此の后の御腹である。

秀忠の辭職と薨去　元和九年秀忠は將軍職を辭して、之を子家光に讓り、翌寛永元年江戸城の西の丸に隱居した。併し政治を視ることは故の通りで同九年正月に薨じた。時に年は五十四歳。江戸市内芝の增上寺に葬られた。此の時は既に秀忠の孫に當る興子内親王が後水尾天皇の讓りを受けて明正天皇となられた後であつたから、何も思ひ殘すことはなかつたであらう。

國史美談　中卷終

年表（中）

御代數	天皇	在位年數	年號	重要なる事柄	紀元年數
九七	後村上天皇	三〇	興國 六	正平二年瓜生野の戰あり	二〇〇七
			同 三	同 三年四條畷の戰あり	二〇〇八
			同 四	同 四年足利基氏關東管領となる	二〇〇九
			同 六	同 六年高師直、師泰殺さる	二〇一一
			同 七	同 七年足利直義殺さる	二〇一二
			同 九	同 九年北畠親房薨ず	二〇一四
			同 十	同 十三年足利尊氏病死し嫡詮繼ぐ。	二〇一八
			同 二	同 二十二年基氏死し子氏滿繼ぐ。	二〇二七
			正平 二三	同年義詮死し子義滿繼ぐ。細川頼之管領たり。	
			同二十三年天皇崩御。後龜山天皇御卽位		二〇二八
九八	後龜山天皇	二五	正平 一	天授四年室町の邸（花の御所）成る	二〇三八
			建德 二	同 五年上杉憲春、氏滿を諫めて自殺す	二〇三九
			文中 三	同 年細川頼之職を罷む	
			天授 六	元中九年頼之死す	二〇五二

			同年天皇京都に還幸の上、神器を後小松天皇に傳へ給ふ。義滿將軍となる	
	弘和三 元中九	明德一 應永一九	應永元年義滿職を辭し子義持之に代る	二〇五四
			同　年義滿太政大臣に任ぜらる	二〇五五
			同　二年義滿出家して道義と稱す	二〇五五
			同　三年道義比叡山に參詣す	二〇五六
			同　四年北山の金閣成り、道義之に移る	二〇五七
			同　五年氏滿死し子滿兼繼ぐ	二〇五八
			同　年三管領、四職を定む	
			同　八年道義始て使を明に送る	二〇六一
			同　九年道義明の使を金閣に引見す	二〇六二
			同　十五年三月天皇北山に御行幸あり。五月道義薨ず。	
			同　十六年滿兼死し子持氏繼ぐ	二〇六八
			同　十九年天皇位を稱光天皇に讓り給ふ	二〇六九
			同　二十六年義持明使を諭して交際を絶つ	二〇七二
			同　三十年義持職を辭し子義量之に代る	二〇七九
			同　三十一年後龜山法皇崩御	二〇八三
			同　三十二年將軍義量卒す	二〇八四
				二〇八五

			正長元年正月義持薨じ、三月弟備後圓遵俗して家を繼ぐ	
			同年七月天皇崩御。後花園天皇位に卽き給ふ	二〇八八
			永享元年義教(義圓)將軍に任ぜらる	二〇八九
			同　四年義教駿河に下りて富士山を觀る	二〇九二
			同　五年後小松法皇崩御	二〇九三
			同　六年外宮の遷宮式行はる	二〇九四
			同　九年天皇室町の第に御行幸	二〇九七
			同　十年永享の亂起る	
			同十一年持氏自殺し永享の亂平ぐ	二〇九八
			嘉吉元年赤松滿祐義教を害す	二〇九九
			同　二年義教の子義勝將軍に任ぜらる	二一〇一
			同　三年義勝卒し、弟義政家を繼ぐ	二一〇二
			寶德元年持氏の子成氏關東管領となる	二一〇三
			同　年義政將軍に任ぜらる	二一〇九
			享德三年成氏上杉憲忠を殺す	
			康正元年義政、成氏を伐たしむ。成氏古河に走る	二一一四
			長祿元年太田道灌江戸城を築く	二一一五
			同年義政の弟政知堀越公方となる	二一一七
			寛正三年內宮の御遷宮式行はる	二一二二

同	五年天皇位を後土御門天皇に讓り給ふ		二一二四

一〇二　後土御門天皇

三七

寛正 一	同	年義政の弟僧義尋還俗して名を義觀と改む	二一二五
文正 一	同	六年義政の夫人富子義尚を生む	二一二七
應仁 二	同	應仁元年應仁の亂起る	二一三三
文明 一八	同	五年三月山名宗全卒し、五月細川勝元卒す	
長享 二	同	年十二月義政將軍職を義尚に讓る	
延德 三	同	八年伊勢長氏駿河の今川義忠に賴る	二一三六
明應 九	同	九年應仁の亂止む	二一三七
	同	十二年今川義忠殺さる	二一四〇
	同	十五年義政東山に銀閣を造りて之に移る	二一四三
	同	十八年太田道灌殺さる	二一四六
	同	年（バルトロメオ、ディアス喜望峰を發見す）	
	延德元年	義尚薨ず	二一四九
	同	二年義政薨じ、義稙將軍に任ぜらる	二一五〇
	同	三年義視（道存）薨ず	二一五一
	同	年政知病死す。長氏伊豆を略す	
	明應元年	（コロンブス亞米利加を發見す）	二一五二
	同	三年義澄將軍に任ぜらる	二一五四
	同	四年早雲（長氏）小田原城を取る	二一五五
	同	六年成氏古河に卒す	二一五七

	同	七年（バスコダガマ印度航路を發見す）	二一五八
	同	九年天皇崩御。後柏原天皇御踐祚	二一六〇

一〇三　後柏原天皇

二七

文龜 三	同年後土御門天皇を葬り奉る		
永正 一七	永正三年（コロンブス死す）		二一六六
	同　七年（ポルトガル人印度のゴアを取る）		二一七〇
	同十四年（ポルトガル人明と貿易を始む）		二一七七
大永 六	同　年（獨逸人ルーテル新教を唱ふ）		
	同　十六年北條早雲歿す		二一七九
	同　年（マジエラン世界一周の途に上る）		
	大永元年（マジエラン、フイリピン群島に殺さる）		二一八一
	同　年天皇卽位の禮を行はせ給ふ		
	同　年義澄の子義晴將軍に任ぜらる		
	同三年毛利元就家を繼ぐ		二一八三
	同四年北條氏綱江戸城を取る		二一八四
	大永六年天皇崩御。後奈良天皇御踐祚		二一八六
	天文三年織田信長生る		二一九四
	同五年木下秀吉生る		二一九六
	同年天皇卽位の禮を行はせ給ふ		
	同十年織田信秀外宮假殿を造營し奉る		二二〇一

一〇四 後奈良天皇

三二

大永一
享祿四
天文二三
弘治三

同十一年綾川家康生る。上杉爲景歿す。	二二〇二
同　年（ザビエー、印度ゴアに來る）	二二〇三
同十二年ポルトガル人種子島に漂着す	
同　年信秀御所の御垣を修理し奉る	
同十三年水野忠政病死す	二二〇四
同十五年義晴の子義輝將軍に任ぜらる	二二〇六
同　年扇谷の上杉氏亡ぶ	
同十六年家康織田氏に質となる	二二〇七
同十八年德川廣忠、織田信秀歿す	二二〇九
同　年家康今川家に質となり駿府に行く	
同　年宣教師ザビエー鹿兒島に來る	二二一〇
同十九年ポルトガル船平戸に來る	
同二十年ザビエー京都に上る	二二一一
同年大内義隆、其の臣陶晴賢に害ぜらる	
同年ザビエー大分に來りて後印度に歸る	
同年上杉憲政越後に走りて長尾氏に賴る	
同年秀吉松下之綱に仕ふ	
同二十一年（ザビエー支那にて病死す）	二二一二
同二十二年平手政秀自殺す。秀吉信長に仕ふ	
同年村上義清越後に走りて長尾氏に賴る	二二一三

弘治元年信玄、謙信と川中島に戰ふ	二二一五
同年嚴島の戰あり	
同二年齋藤義龍父秀龍を害す	二二一六
同三年大内義長自殺す	二二一七
同年天皇崩御。正親町天皇御踐祚	
同年（ポルトガル人澳門を借地す）	二二二〇
永祿三年正月天皇卽位の禮を行はせ給ふ	
同年五月桶狹間の戰あり	
同年家康岡崎城に入る	
同四年信長、家康と和す	二二二一
同年齋藤義龍死し、龍興繼ぐ	
同年信玄、謙信川中島に戰ふ	
同六年外宮の遷宮行はる	二二二三
同七年三好長慶卒す	二二二四
同年信長美濃を從へて岐阜に移る	
同八年松永久秀等將軍義輝を害す	二二二五
同年義輝の弟義昭出奔す	
同年（イスパニヤ人フイリピン群島を取る）	
同九年元就尼子氏を降す	二二二六
同十年信長御料地恢復の詔を拜受す	二二二七

同十一年二月義輝の從弟義榮將軍に任ぜらる		二二二八
同年七月義昭信長に頼る		
同年九月、信長、義昭を奉じて入京す		
同年同月久秀等降る。將軍義榮薨ず		
同年十月義昭將軍に任ぜらる		
同年十二月信玄、家康と氏眞を逐ふ		
同十二年信長二條城を築き、御所修理を始む		二二二九
同年十月信長伊勢に攻入り北畠具教と和す		
元龜元年正月家康濱松に移る		二二三〇
同年二月御所の修理成る		
同年四月信長朝倉征伐を始む		
同年六月柴田勝家六角勢を破る		
同年同月姉川の戰あり		
同二年六月毛利元就卒す		二二三一
同年イスパニヤ人マニラに役所を置く		
同年九月信長延曆寺を燒く		
同年十月北條氏康卒す		
同三年信長將軍義昭を諫む		二二三二
同年十二月三方原の戰あり		
天正元年正月村上義清病死す		二二三三

一〇五 正親町天皇

永祿一二	三〇	
元龜三		
天正一四		
同年三月信長義昭を攻め、後和す		
同年四月信玄卒す		
同年七月義昭遂はれて足利將軍家亡ぶ		
同年八月朝倉義景、淺井長政滅さる		
同年秀吉長濱城主となる		
同三年五月長篠の戰あり		
同年秀吉石田三成(佐吉)を召使ふ		二二三五
同年十一月信長岐阜城を子信忠に讓る		
同四年二月信長安土城に移る		二二三六
同年信長南蠻寺を建てしむ		
同五年二月家康從四位下右近衛權少將に任ぜらる		二二三七
同年信長中國征伐を羽柴秀吉に命ず		
同六年謙信卒す。信長安土山の記を作らしむ		二二三八
同七年明智光秀丹波の八上城を攻む		二二三九
同八年正月家康從四位上に敍せらる		二二四〇
同年石山本願寺紀伊鷺森に移る		
同十年三月武田氏亡ぶ		二二四二
同年五月秀吉備中の高松城を圍む		
同年六月二日本能寺の變あり		
同年同月四日清水宗治自殺し、秀吉毛利氏と和す		

同年同月十三日山崎の戰あり	
同年同月十八日清洲會議を始む	
同年十月秀吉從五位下に敍し左近衛少將に任ぜらる	
同年十一月秀吉、信孝を攻め、後和す	
同年大友、有馬、大村の三氏使をローマに送る	
同十一年正月秀吉、瀧川一益を伊勢に攻む	
同年四月二十日中川清秀戰死。二十一日佐久間盛政敗北。二十四日勝家自殺。五月二日信孝自殺。同月盛政殺さる	二二四三
同年六月秀吉從四位下に敍し參議に任ぜらる	
同年十一月秀吉大阪城を築く	
同年家康正四位下右近衛權中將に任ぜらる	
同年本願寺和泉の貝塚に移る	
同十二年二月家康從三位に敍し參議に任ぜらる	二二四四
同年四月小牧、長久手の役あり	
同年八月大阪城成る。十一月秀吉、信雄と和し、十二月家康と和す	
同年十一月秀吉從三位に敍し權大納言に任ぜらる	
同十三年三月秀吉紀伊を伐ち、七月四國を平げ、八月北陸を征伐す	二二四五

同年三月秀吉正二位內大臣に任ぜられ、其の母に大政所（おほまんどころ）、夫人に北政所（きたのまんどころ）の稱を賜ふ	
同年七月秀吉從一位に敍し關白に任ぜらる	
同年秀吉聚樂の第を京都に造り始む	
同年十月伊勢の神宮の御遷宮式行はる	
同年秀吉南蠻寺を破壞す。本願寺大阪に移る	
同十四年秀吉の妹朝日姫家康の後妻となる	二二四六
同年秀吉京都に方廣寺を建て始む	
同年十月家康權中納言に任じ翌月正三位に敍せらる	
同年十一月天皇位を後陽成天皇に讓り給ふ	
同年十二月秀吉太政大臣に任ぜられ豐臣の姓を拜受す	
同年秀吉使を朝鮮に遣はす	
同十五年五月秀吉島津義久を降す	二二四七
同年六月佐々成政肥後に封ぜらる	
同年八月家康從二位に敍し權大納言に任ぜらる	
同年九月秀吉聚樂の第に移る	
同年秀吉松下吉綱に丹波の內三千石の領地を與ふ	
同十六年四月天皇聚樂の第に行幸し給ふ	
同年五月秀吉北條氏直に上洛を促す	二二四八
同年閏五月佐々成政自殺す	

同	十七年方廣寺成る。鶴松生る	二二四九
同	年琉球の使者上洛す	
同	年秀吉宗義智を朝鮮に使せしむ	
同	十八年七月北條氏直降る。大友、有馬、大村三氏の使ローマより歸朝す	二二五〇
同	年八月一日家康江戸城に入る	
同	年九月秀吉書をフイリピンの大守に贈る	
同	年同月秀吉松下吉綱を駿河にて一萬石の領主とす	
同	年十一月朝鮮の使者來る	
同	十九年正月秀長薨ず。八月鶴松死す。	二二五一
同	年秀吉朝鮮征伐の命令を出す	
同	年十二月秀吉關白を罷め、秀次之に代る	
同	年本願寺京都に移る	
同	年秀吉五大老を置く	
文	祿元年四月征韓軍の先鋒名護屋出發	二二五二
同	年五月加藤清正、小西行長等京城に入る	
同	年六月行長平壤ゝ占領す	
同	年七月清正二王子を擒にす。行長明軍を破る	
同	年同月大政所薨ず。	
同	二年正月行長京城に退却す。正親町上皇崩御。	

一〇六 後陽成天皇

二六

天正	五	
文祿	四	
慶長	一六	
同	小早川隆景明軍を碧蹄館に破る	二二五三
同	年四月行長明人沈惟敬と和を議す。八月秀賴生る	
同	年十一月秀吉書を臺灣に贈る	
同	三年正月秀吉伏見城を築く	二二五四
同	四年七月秀次高野山に自殺す。八月聚樂第を毀つ。九月秀吉の養女德姫德川秀忠の夫人となる	二二五五
慶	長元年五月家康正二位内大臣に任ぜらる	二二五六
同	年七月大地震のため方廣寺の大佛破壞す	
同	年九月秀吉明使を大阪城に引見す	
同	二年秀吉再び朝鮮を征伐す	二二五七
同	年八月義昭(昌山)薨ず	
同	年十二月明軍蔚山を圍む	
同	三年正月蔚山の圍解く。上杉景勝會津に封ぜらる。八月秀吉薨ず	二二五八
同	年十月泗川の戰あり	
同	四年正月秀賴、淀君大阪城に移る	二二五九
同	年閏三月前田利家薨ず。清正等七人三成を除かんとす	
同	年四月秀吉に豐國大明神の神號を賜ふ	
同	年五月長曾我部元親卒す	

同年九月上杉景勝會津に歸る	
同五年六月家康會津征討の令を出す	
同年七月二日家康江戸に着す	
同年同月毛利輝元西軍の盟主となる	
同年八月一日伏見城陷る	
同年九月十二日田邊城の圍解く	
同年同月十五日關原の戰あり	
同六年景勝米澤に封ぜらる。板倉勝重京都所司代となる	
同七年正月家康從一位に、秀頼正二位に敍せらる	二二六〇
同年二月家康東本願寺を建つ。六月江戸城中に文庫を設く	
同年十月小早川秀秋薨ず	二二六一
同年十二月改造せし方廣寺の大佛燒く	二二六二
同八年二月家康將軍に任ぜらる	
同年四月秀頼内大臣に任ぜらる	
同年七月秀忠の女千姫大阪城に送らる	
同年八月宇喜多秀家八丈島に流さる	二二六三
同十年四月家康將軍を辭し秀忠之に代る	
同年同月秀頼右大臣に任ぜらる	二二六五

同十一年江戸城を增築す	二二六六
同十二年德川義直名古屋に封ぜらる	二二六七
同年駿府城成り家康之に移る	
同十三年眞田昌幸病死す	二二六八
同年家康秀頼に方廣寺の再建を勸む	
同十四年和蘭人に通商を許す	二二六九
同年德川頼房水戸に封ぜらる	
同十五年名古屋築城の工事を起す	二二七〇
同年方廣寺再建の工事を起す	
同十六年正月島津龍伯(義久)卒す	二二七一
同年三月天皇位を後水尾天皇に讓り給ふ	
同年同月秀頼上洛して家康に對面す	
同年六月加藤清正卒す	
同十七年三月方廣寺の大佛成る	二二七二
同十八年伊達政宗支倉常長をローマに遣す	二二七三
同年英人の通商を許す	
同十九年四月方廣寺の鐘成る	二二七四
同年八月二日翌日の大佛供養の式を停む	
同年大阪冬の役あり(十一月より十二月まで)	
元和元年五月大阪夏の役あり。豐臣氏亡ぶ	二二七五

一〇七　後水尾天皇（ごみづのを）

一九　慶長三　元和九　寛永六

同年同月片桐且元病死す
同年七月武家諸法度、公家法度出づ
同二年四月十七日家康薨ず。久能山に葬る
同三年四月家康の柩を日光山に改葬す
同年八月後陽成上皇崩じ給ふ
同五年六月福島正則川中島に移され、德川頼宣和歌山に封ぜらる　二二七九
同年九月藤原惺窩歿す
同年大阪城幕府の直轄となる（じきかつ）　二二八〇
同六年六月秀忠の女和子入内す（じゅだい）
同年八月支倉常長歸朝す
同七年僧清韓歿す　二二八一
同九年七月秀忠職を辭し家光之に代る　二二八三
寛永元年七月福島正則卒し、九月北政所薨ず　二二八四
同二年毛利輝元薨ず　二二八五
同四年上野の寛永寺成る（うの）　二二八七
同六年十一月天皇位を皇女（明正天皇）に讓り給ふ　二二八九

不許複製

大正八年四月十日印刷
大正八年四月十八日發行

定價金壹圓拾錢

□國史美談□
中卷

編者　北垣恭次郎　東京市小石川區原町一二五番地

發行者　增田義一　東京市京橋區南紺屋町十二番地

印刷者　笠間音次　東京市芝區愛宕町三丁目二番地

發行所　東京市京橋區南紺屋町十二番地
實業之日本社
電話京橋八七四、八七五、八七六、九八九
振替口座東京三二六番

東洋印刷株式會社印行

□國史美談 三版 東京高師助教授 北垣恭次郎先生著 上卷定價壹圓拾錢 郵税六判 四六總布

□學生參考日本歷史通覽 新刊 文學士 高桑駒吉先生著 定價十二圓 郵税六判 四六總二布

□東洋歷史通覽 大冊 近刊 文學士 高桑駒吉先生著 定價未定 郵税六判 四六總未定布

□開國大勢史 侯爵 大隈重信閣下著 定價五圓 郵税十六 菊判 大冊

□江戸俠客物語 三版 坪内、三上兩博士序 林和先生著 定價九十錢 郵税六判 四六總布

□江戸むらさき 三版 文學士 笹川臨風先生著 定價一圓 郵税八判 四六總布

□清教徒神風連 再版 福本日南先生著 定價一圓廿錢 郵税八判 四六總布

□栗山大膳 再版 福本日南先生著 定價一圓六十錢 郵税十二 菊判 總布

□少女小説 涙の物語 二十二版 幼年の友主筆 岩下小葉先生著 定價三十五錢 郵税四 菊判 四六本

□少女對話集 ベルの音 三版 澁澤青花先生著 定價八十錢 郵税六 菊判 四六本

□オ ト ギ 三版 坪内博士補修 矢口達先生著 定價八十錢 郵税六 菊判 四六本

□繪入小唄集 どんたく 二十版 竹久夢二先生著 定價七十錢 郵税四 菊判 四六本

□繪入お伽集 青い船 再版 竹久夢二先生著 定價一圓 郵税八 菊判 四六本

□他に例のない 面白い家庭の遊戯 四版 中村八郎先生著 定價六十錢 郵税四 小型總布製

□少女讀本 再版 村井弦齋先生著 定價一圓八錢 郵税六倍判 四六本

□我が子の金錢教育 再版 商學士 麓三郎先生著 定價九十錢 郵税六 菊判 四六總布

□小學兒童おさらひの仕方 二十九版 東京兩高等師範學校教官十六名共著 定價六十五錢 郵稅六 判全一冊

□模範解說讀方獨習 五版 東京女子高師教官 荒井忠吉先生著 定價五十五錢 郵稅六 判全一冊

□模範解說算術獨習 十六版 東京女子高師教官 荒井忠吉先生著 定價五十五錢 郵稅六 判全一冊

□笑ひながら覺えられる正式の算術 二十版 中村八郎先生著 定價六十五錢 郵稅六 判全一冊

□笑ひながら覺えられる中等算術 上下二冊 四版 中村八郎先生著 上卷七十五錢 下卷八十五錢 郵稅八 判全三冊 郵稅八錢

□實用能書術 七版 西脇吳石先生著 定價七十錢 郵稅六 判全一冊

□桂月學生文範 上下二冊 上卷及下冊下再版 大町桂月先生著 定價各冊一圓 郵稅各冊八錢 三 判總布

□校歌ローマンス 七版 出口競先生著 定價六十五錢 郵稅六 判總布

□神秘探偵外相の奇病 再版 永代靜雄先生著 定價九十錢 郵稅六 版美本

□ニコ〳〵双紙 四版 日本少年編輯長 松山思水先生著 定價七十錢 郵稅六 判美本

□世界童話集 東洋の卷 三版 萩野博士序 榎本秋村先生著 定價一圓 郵稅八 判美本

□世界童話集 西洋の卷 再版 萩野博士序 榎本秋村先生著 定價一圓 郵稅八 判美本

□お伽夜話 九版 幼年の友主筆 岩下小葉先生著 定價六十五錢 郵稅六 判美本

□訂正增補優等學生勉强法 十三版 實業之日本社編 定價四十錢 郵稅四 判總布

□名士實話青年勉强法 再版 實業之日本社編 定價一圓卅五錢 郵稅十二錢 菊判總布

□各種職業青年無學資立身法 再版 實業之日本社編 定價一圓十錢 郵稅八 判總布

□芳水詩集 三十九版 日本少年主筆 有本芳水先生著 郵定價五十錢 稅六錢 菊半截美本

□詩集旅人 十五版 日本少年主筆 有本芳水先生著 郵定價四十五錢 稅六錢 菊半截美本

□詩集ふる郷 六版 日本少年主筆 有本芳水先生著 郵定價六十錢 稅四錢 菊半截美本

□幼きものに 六版 島崎藤村先生著 郵定價六十錢 稅六錢 判美本

□口語詩集赤い椿 四版 少女の友主筆 星野水裏先生著 郵定價四十五錢 稅四錢 菊半截美本

□親のため子のため 六版 東洋家政女學校長 岸邊福雄先生著 郵定價一圓 稅八錢 判總布

□學生論 再版 男爵 奥田義人先生著 郵定價八十五錢 稅六錢 判總布

□趣味の動物 再版 理學博士 谷津直秀先生著 郵定價八十錢 稅八錢 判美本

□改訂增補岡田式靜坐法 八十五版 實業之日本社編 郵定價六十錢 稅六錢 判總布

□簡易斬新實用的强健法 十版 伊藤銀月先生著 郵定價九十錢 程八錢 判總布

□體力精力增進法 第十八版 醫學士 樫田十次郎先生著 郵定價四十錢 稅四錢 菊半截美本

□性慾研究と精神分析學 五版 醫學博士 榊保三郎先生著 郵定價貳圓 稅八錢 判總布

□救急處置家庭療法 再版 醫學士 森繁吉先生著 郵定價五十錢 稅四錢 菊半截美本

□腦の衞生 十一版 醫學士 樫田十次郎先生著 郵定價五十錢 稅四錢 菊半截美本

□胃腸の衞生 八版 醫學士 野田太市先生著 郵定價五十錢 稅四錢 菊半截美本

□禪と健康 四版 陸軍中將 堀內文次郎閣下著 郵定價六十錢 稅六錢 判總布

□海へ　六版　島崎藤村先生著　定價一圓卅錢　郵稅八錢　四六判美本

□現代の藝術　再版　文學博士　上田敏先生著　定價一圓卅錢　郵稅八錢　四六判總布

□渡り鳥日記　三版　文學博士　松本亦太郎先生著　定價二圓卅錢　郵稅八錢　四六判總布

□社會と自分　十五版　夏目漱石先生著　定價一圓五十錢　郵稅八錢　三六判總布

□人性論　三版　醫學博士　永井潛先生著　定價二圓卅錢　郵稅十二錢　菊判總布

□哲學と文藝　三版　文學博士　桑木嚴翼先生著　定價二圓廿錢　郵稅八錢　四六判總布

□文明の末路　五版　イ・ドネリー氏原著　定價一圓　郵稅八錢　四六判總布

□易の原理と其應用　四版　法學士　細貝正邦先生著　定價一圓卅錢　郵稅八錢　三六判總布

3276

終